

〔共同研究：いのちの文化に関する歴史的研究〕

## 二度目の葬式

——「精霊流し」にみる長崎人の死生観——

「この町で死者になるのは、寂しくない」（『長崎迷宮旅暦』）

野 原 康 弘

### プロローグ

「来年は、うちん船ん出るとよ。」

「そげんことなか。うちん船が先ばい。」

長崎では、良く耳にする会話である。「船」というのは、精霊船のこと。「船ん出る」とは、「精霊船」を流してもらうこと。はっきり言えば、来年の盆には、亡くなっているということ。四十九日の法要が済まないと、精霊船は出せないの、さらに厳密に言えば、来年の6月半ごろまでには、あの世に行く必要がある。

年を取ってくるとこのような会話が、良くなされる。それも気楽に。まるで、精霊船で流されるのを楽しみにしているかのよう。いや、実際、そうかも知れない。

このような会話に仲間入り出来る年になったので、「精霊船を出すということが、長崎人にとってどのようなことか」を真摯に取り組んでみることにする。

長崎を出て半世紀。「じげもん（生粋の長崎人）」から見れば、もうとっくに長崎人の資格は失って、「よそ者」と糊塗してしまったが、改めて、「長崎の精霊流し」を調べてみようと思立った。2017年夏、7日間、長崎の町をひたすらさるいてみた（歩いて回った）。

### 死にゆくことを楽しみたい？

「この世の苦しみからのがれられないならば、せめて来世は安らかなせかいへ——。」

『日本その心とかたち—前世から浄土へ』（p. 19）

釈徹宗住職は、中陰法要のとき、「院中さん（住職のこと）、うちのおばあちゃんどこに行

\* 本稿は、桃山学院大学共同研究プロジェクト「いのちの文化に関する歴史的研究」（15共244）の成果報告である。

キーワード：盂蘭盆、精霊流し、補陀落、死後の世界、葬式

きはったんでしょうか。なんだかとても気になります」と、檀家の人から尋ねられて、「私にはわかりません」と答えた（『仏教ではこう考える』pp.136-138）、そうである。

釈徹宗氏は、浄土真宗本願寺派・如来寺の住職であり、かつ、宗教思想を専門とする大学教授でもある。もちろん、お寺のご住職であるから、「でも、今、読経させて頂いた仏典には『念仏者はお浄土へ往生する』と出てきます。亡くなったおばあちゃんは、りっぱなお念仏者でした。ですからお浄土へ往かれたにちがひありません」（『同書』p.137）と、続けたと述べてある。

尋ねた檀家の方が、釈住職のお答えをどのように受けとめたかは、書かれていないが、私は、本当に誠実な答えだと思う。

科学のすさまじい発達のために、科学がその存在を証明できなければ、それは完全に存在しないものとして扱われてしまう危険性がある今の社会。ところが、科学が証明できないものはたくさんある。その一つが「死後の世界」すなわち「来世」。よく言われるように、これは人類にとって、最大にして永遠の謎なのである。

「現世もさながら地獄ならば、来世もまた同じ苦しみのだろうか。死の恐怖からのがれ、人生を安らかに送る道はないものか——。」

『日本その心とかたち—現世から浄土へ』（p.14）

そのために、我々は目に見えない「神」に祈り、姿を見せる「仏」にすがる。亡くなった人がどうなったのか、どこへ行ったのかを模索する。

われわれの身近には、「神」や「仏」とよばれるものだけでも、神さま、仏さま、観音さま、荒神さま、お地蔵さま、氏神さま、鎮守の神さま、龍神さま、産神さま、水神さま、土神さま（長崎では、墓所にも、そこを守って下さる神さまがいると信じられていて、「つちがみさま」とお呼びして、大事にお祀りしている）などなど数えきれない。長崎では、あの立派な諏訪神社でさえ、敬い親しみを込めて「おすわさん」とお呼びしている。「おすわさん」の方からすれば、馴れ馴れしいと思っているかも知れないが……。お寺もそのご住職も両方とも、「おてらさん」と呼ばせてもらっている。大阪でも、弘法大師のことを「おだいっさん」、戎神社のことを「えべっさん」、京都でも、北野天満宮を「天神さん」と呼んでいるように。しかし、この神さまや仏さまへの親しさが、日本人の宗教観、あるいは仏教観であるかも知れない。

また、「死や死後の世界と関連する言葉」も、逝去、永眠、往生、さらに天国、地獄、霊界、冥土、あの世、六道、輪廻、彼岸、此岸、三途の川、六文銭、奪衣婆などなど。

「臨死」を経験したという人たちの体験談も時々、話題になる。例えば、カール・ユングが「幻像」（『ユング自伝—思い出、夢、思想』pp.124-136）で書いているように、昏睡状態に陥ったとき体験した臨死など、また、立花隆氏の『臨死体験』には、「対外離脱」など

詳しく解説されている。

自分自身の臨死体験研究で有名なレイモンド・ムーディ氏の『臨死共有体験』は、死にゆく人だけでなく、その人に寄り添っている人、いわゆる、生きている家族などにも臨死体験が共有されることを報告した研究であり、非常に興味深い。ただ、この場合でも、単に「脳内現象」と片付けられてしまう可能性が高く、死後の世界へ行ってきたことを証明するのはなかなか難しいと思われる。

やはり、「死後の世界」について、「『正解はこう』と生きている人は誰も答えられないのです（『死をめぐる50章』 p.22）」というのが、正直な答えで、今の段階では、死後の世界については、何一つ確かなことはないのである。

ただし、人生でただ一つ確実なことがあります。

人生の最終解答は「死ぬこと」だということです。

これだけは間違いのない。過去に死ななかった人はいません。

人間の致死率は100パーセントなのです。

養老孟司 『死の壁』 (pp.12-13)

この世の中は、不平等なことばかりである。唯一、誰にも平等と言えるものは、「死」だけかもしれない。信心深いかどうかはさておき、善人か悪人かに関係なく、貧富の差に拘わらず、「死」は誰にも、それこそ平等に、しかも確実に訪れてくる。

そして、死んだらどうなるのか、別の世界が準備されているのか。準備されているとしたら、それはどのようなところなのか。何もわかっていない。

『徒然草』第七段の冒頭 (p.26) には、次のように書かれてある。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙立ち去らでのみ住み果つる習いならば、いかにものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

「あだし野の墓地の露は消えるときがなく、鳥辺山の火葬の煙は、立ち昇ってとぎれることがないが、もし人がそれに似て、いつまでも生きながらえる習わしであったなら、どんなにか、この世は趣のないものになることであろう。人の世は無常であるからこそ、面白みがあるのである」

『現代語訳 日本の古典 徒然草・方丈記』 (p.16)

確かに、この世は「刻々と変貌していく、無常の世界である」。決まっていないからこそ、驚きがあり、楽しみもある。

「これまで見たことのないような新しい世界が広がっているかも知れませんよ（『死の壁』）」

という人もいる。なるほど、そうかもしれない。

「死んでみて、『アー、こういうことだったのか』と気づくところが面白い（『死をめぐる50章』）」という人もいる。

このように、死にゆくことを楽しみにできたら素晴らしいのだが、現実にはなかなかそうはいかない。たとえそう思うことができたとしても、死後の不安がすっかり解消されるとも思われない。われわれは生まれた途端、死に向って歩き始めているのだから。

### 地藏菩薩と民間信仰

長崎のわが家の場合、最初に幼なくして姉が、かなり間が空いて、母が、ついで父が、続いて妹が次々と亡くなっている。彼らは今、一体どこにいるのだろうか。

積尊（「お釈迦さま」）の高弟、目連尊者（目連さん）の亡き母のように、「餓鬼道」（「六道」の一つ、後述）に堕ちてしまい、焰口餓鬼になって、飲まず食わずのひもじさから、骨と皮だけにやつれてはいないだろうか。両親は、餓鬼道に堕ちるほど慳貪でもなかったとは思うのだが。

また、夭逝の姉は、どうしているのだろうか。幼すぎたため、三途の川を渡れず、その付近に集まっているのだろうか。

そこは、「賽の河原」と呼ばれて、子供たちが、現世にいる親兄弟を思いながら石を塔（「回向の塔」）のように積み上げている場所。せっかく積んでできた塔も、すぐに鬼に崩されてしまう。それでも子どもたちは、生前でできなかった功德を積んで塔を作り続けている（田中久美子『地獄百景』pp. 32-35）。

この「賽の河原」の信仰は、青森県の恐山などにもみられる、日本独特の民間信仰である。

これはこの世のことならず、  
死出の山路のすそ野なる、  
さいの河原の物語、  
十にも足らぬ幼な児が、  
さいの河原に集まりて、  
峰の嵐の音すれば、  
父かと思ひよちのほり、  
谷の流れをきくときは、  
母かと思ひはせ下り、  
手足は血潮に染みながら、  
川原の石をとり集め、  
これにて回向の塔をつむ、  
一つつんでは父のため、

二つつんでは母のため、  
 兄弟わが身と回向して  
 昼はひとりで遊べども、  
 日も入りあひのその頃に、  
 地獄の鬼があらはれて、  
 つみたる塔をおしくづす

わが一家族の歴史「恐山和讃」

これは、寺山修司氏の『田園に死す』の冒頭に置かれている「序詞」である。「恐山和讃」と書かれてはいるが、一般に良く知られている「地蔵和讃」を下敷きにしているのは、明らかである。「地蔵和讃」というのは、地蔵菩薩のことをわかりやすく七五調風に句を重ね、讃嘆した歌である。

恐山という日本三大霊場の一つがある青森県は、寺山修司氏の故郷である。この霊場には、熱湯地獄があり、三途の川があり、さらに「賽の河原」がある。まさに、地獄そのものの有様をみせている。

「幼くして亡くなった子供たちは、『親より先に死んで、親を悲しませた』というだけの罪で、冥土のこの「賽の河原に」に集められて、石を拾い集めて、父母に功德を施すために塔を作り、鬼に崩され、また作るという苦しみを受けている」というのが物語の前半である。これが「地蔵和讃」として広く知られているもので、解脱上人（鎌倉時代の僧）の作と言われている。

これはこの世のことならず  
 死出の山路の裾野なる  
 賽の河原のものがたり  
 <中略>  
 ここに集まる幼児は  
 小石小石を持ち運び  
 これにて回向の塔を積む  
 <中略>  
 一重積んでは幼児が  
 紅葉のような手を合わせ  
 父上菩提と伏し拝む  
 二重積んでは手を合わし  
 母上菩提回向する

三重積んでは古里に  
 残る兄弟わがためと  
 礼拝回向ぞしおらしや  
 <中略>

ここで、冥土の鬼が現れて、幼児たちがせっかく積み上げた塔を打ち崩し、さらに金棒を振り回す。幼児たちは怖がって逃げ回る。そこへ突然、

おりしも西の谷間より  
 能化の地獄大菩薩  
 動き出でさせ給いつつ  
 幼きものの傍により  
 <中略>  
 今日よりのちは我をこそ  
 冥土の親と思うべし  
 幼きものを御衣の  
 袖や袂に抱き入れて  
 憐れの給うぞありがたや  
 いまだ歩まぬ嬰兒を  
 錫杖の柄にとりつかせ  
 忍辱慈悲の御肌に  
 泣く幼児を抱きあげ  
 助け給うぞありがたや

「地藏和讃」(『地藏さま入門』、『地藏信仰』)より

地藏菩薩が現れて、賽の河原で、苦しんでいる子供たちに助勢してくれるという、人々の感涙を誘う物語になっている。幼くして亡くなった子供たちに救済の手を差し伸べてくれる地藏菩薩。その存在が、この荒涼とした恐山に、幼児を失くした親たちを参集させているのであろう。両親も、地藏菩薩の慈悲にすがり、姉の救済を願いつつ、供養を続けていたのかも知れない。

もともと、地藏菩薩は、子どもたちだけでなく、地獄に堕ちた大人でさえも救ってくれると信じられていた。いったん、地獄に堕ちると、そこから抜け出すのは、容易なことではない。その地獄で衆生を苦海から救い、彼岸へ導いてくれるのも地藏菩薩であると、言われている。(『暮らしの中の神さん仏さん』 pp. 155-156)

地藏菩薩、お地藏さんは、いたるところで見られる。峠や道端や、四つ辻や、田んぼの畔

にさえ祀られている。

俳人小林一茶の次の二つの句は、

筍の 番してござる 地藏かな  
見物に 地藏も並ぶ おどり哉

すっかり大衆に溶け込んだお地藏さまの姿を見せている（『地藏菩薩』 p. 20）。

京都、比叡山、横川（僧侶源信が隠棲していた場所、源信については後述）の仰木地区には、住民の数、約800人よりも、お地藏さんの数の方が多く、1000体以上祀られていると言われている。

この仰木地区では、お地藏さんへの信仰が篤く、一軒に一体はお地藏さんがあり、生前からお地藏さんをお参りしているという。熱心にお参りをしておけば、万が一、地獄に堕ちたとしても、お地藏さんが救ってくれると本当に信じられているそうである。葬式も最初に地藏堂で行い、その後、墓地に移されるということであった。それほど、お地藏さんを敬い、頼りにしている地区である。

### 死者の葬り方

葬儀の仕方には、国により、宗教により、その土地により、あるいは死者の希望により、さらに、残された人たちの経済事情や個人の思想信条などにより、様々な形式が見られる。

『仏教のことば』（p. 99）によれば、「葬儀」の「葬」という文字は、死体を上と下から草でおおうと書き、死体を隠して見えなくするという意味を表すと説明されている。

恐らく、この漢字が作られた時、死体は、下の草が意味する野原の草の上に置かれ、その死体の上から、上の草かんむりの意味する草を被せて隠してしまうことを示していたのであろう。すなわち、死体は穢れたものとみなされていたので、草の生えている原っぱに死体を捨てて、上から草を被せ、朽ち果て、土に帰っていくまで放置しておいたと思われる。

高見順氏の「帰る旅」という、死に向っているにも拘らず、清々しい詩がある。

帰れるから  
旅は楽しいのであり  
旅の寂しさを楽しめるのも  
わが家にいつかは戻れるからである  
だから駅前のしょっからいラーメンがうまかったり  
どこにもあるコケシの店をのぞいて  
おみやげを探したりする

この旅は  
 自然に帰る旅である  
 帰るところのある旅だから  
 楽しくなくてはならないのだ  
 もうじき土にもどれるのだ  
 おみやげは買わなくていいか  
 埴輪や明器のような副葬品を

大地へ帰る死を悲しんではいけない  
 肉体とともに精神も  
 わが家へ帰れるのである  
 ともすれば悲しみがちだった精神も  
 おだやかに地下で眠れるのである  
 ときにセミの幼虫に眠りを破られても  
 地上のはかない生命を思えば許せるのである

古人は人生をうたかたのごとしと言った  
 川を行く舟がえがくみなわを  
 人生と見た昔の歌人もいた  
 はかなさを彼らは悲しみながら  
 口に出して言う以上同時にそれを楽しんだに違いない  
 私もこういう詩を書いて  
 はかない旅を楽しみたいのである

「帰る旅」『高見順詩集 <死の淵より>』

作者は、死んでいくことを「わが家に戻れる」、「自然に帰る」、「土にもどれる」、「大地へ帰る」、「わが家へ帰れる」、「地下で眠れる」と表現し、最後に、「はかない旅を楽しみたい」と結んでいる。このように死にゆくことを爽やかに受けとめられたらと思う。

「人はみな還ってゆく。それを往生と称することもある。そのイメージには、終焉という感じはない。なにか新しいドラマがはじまるのを期待して、波立つきもちがある。」

これは五木寛之氏の言葉である（『うらやましい死にかた』p.16）。このような余裕のある死に方が出来るには、亡くなる前に、そのための準備が必要である。それも十分な準備が。例えば、自分がどのように葬られたいか。自分の葬儀は、せめて自分で、生前、具体的に決



めておけば、死への不安も少しは軽減されはしないか。そのために、最新式のものも含めて、葬儀の形態を調べてみなければならない。

### 葬儀の種類

最近、いろいろな新しい葬儀（例えば、「宇宙葬」や「海中葬」など）が考え出されている。葬儀ではないが、夫婦が死後、同じ墓に入らない「死後離婚」という形態も新しいものである。

しかし、どんなに新しい葬儀形態が出現しようとも、葬儀は、インドから伝わって来た「四葬」という葬儀の形態が今でも基本になっている。「四葬」とは、「土葬」、「林葬」、「火葬」、「水葬」の四種類である。新しい葬儀形態、宇宙葬にしても、海中葬にしても、まずは火葬を行わなければならない。この他に、ミイラ葬、冷凍葬、洗骨葬などもあるらしいが、特殊なケースなので、ここでは、四葬を中心に、以下に列挙してみる。

まずは、土葬から始めよう。

(1) 土葬：遺体を棺にいれて、土に穴を掘って埋める葬り方。

日本では、1900年頃までは、70パーセントは土葬であった。1950年になって、やっと土葬と火葬が半々ぐらいになる。現在では、限りなく100パーセントに近いぐらいに火葬がほとんどであるが、特別な事情により、例えば、東日本大震災の時、火葬場が使用できないところでは、土葬にされたケースもあった。しかし最近では、離島という立地条件のため、あるいは、火葬場がなく土葬を余儀なくされている場所を除いて、土葬は、一般的ではなくなった。

一方、キリスト教、イスラム教、儒教などは、土葬の方が多い。キリスト教の埋葬の時に使われるのが、祈祷書の中のあの有名な「……土は土に、灰は灰に、塵は塵に還すべし……」という一節である。

We therefore commit his body to the ground: earth to earth, ashes to ashes, dust to dust; in sure and certain hope of the Resurrection into eternal life.

*The Book of Common Prayer*

『旧約聖書』には、神は人間を自らに似せて（「神の像」とか「神の似姿」言われている）、土から造られたとある。

And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and there he put the man whom he had formed.

*Genesis, Chapter 2, 7.*

「神ヤハウエは大地の塵をもって人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き入れた。そこで人は生きるものとなった。」

『旧約聖書 創世記』(p. 7)

だから、亡くなった人間を、造った元の土に還すというのは、自然な行為である。

In the sweat of thy face shalt thou eat bread, till thou return unto the ground; for out of it wast thou taken: for dust thou art, and unto dust shalt thou return.

*Genesis*, Chapter 3, 19.

「あなたが大地に戻るまで、あなたは顔に汗して、食物を得ることになろう。あなたは大地から取られたのである。あなたは塵だから、塵に戻る。」

『旧約聖書 創世記』(p. 22)

しかし、仏教の教えには、「人類の始まり」については、何も記述されていないように思う。

だから、「土に還る」という表現は、普通によく使用されるが、本来はキリスト教的な発想から生じたものであるから、仏教でいうときには、「土に還る」より「自然に還る」の方がまだ良いかも知れない。

土葬の話に戻ると、北欧の国々でも、キリスト教改宗以前は、葬儀もいろいろな形態があったようだ。その一つが「船葬」。「船葬」ということばのイメージからして、船に乗せて海に流す、水葬(後述)の一つと思われるが(確かに、遺体を船に乗せ、火を点けて、海に流すこともあったよう)だが、実は、土葬である。死者を船に乗せて、流すのではなくて、船ごと土に埋めるのである(『図説 北欧神話』p.223)。イギリス、イースト・アングリアの「サットン・フー(Sutton Hoo)」で発見された「船葬墓」は、北欧から渡ってきたアングル族、東アングリア王リャドワルドの墓だと言われている。

スウェーデンのゴッドランドには、列石が船の形に並べられた、ヴァイキング時代の船葬墓が存在している(『世界のお墓』pp. 32-33)。

それに対して、ゾロアスター教では、「死体で大地を穢してはならないと信じられている(『死者を弔うということ』p.130)」ので、土に埋めることをしないで、別の方法を採用していた。例えば、高い塔を造り、死体をその上に置いたままにしておくもので、「塔葬」と呼ばれるものである。しかし、環境の大きな変化のため、イランなどでは土葬を余儀なくされているところもある。

別の方法の一つに「林葬」がある。

(2) 林葬：死骸を林中に放置しておくだけで埋めることはしない。林葬は、さらに、「風葬」と「鳥葬」に分類できる。

- ① 風葬（野晒し葬）：死骸を山林や平地、あるいは樹上に野晒しの状態で放置し、風雨にさらしたままで、自然に消滅させる葬り方。
- ② 鳥葬：死骸を野や樹木の上に晒して、鳥に食べさせる方法で、土葬して死者の肉体を地中のバクテリアに分解させるより、鳥の力を借りた方法である。「鳥葬」は、英語では“sky burial”か“platform burial”と表現されているように、「天葬」、「空葬」、「塔葬」と同じである。

チベット高原の「ハゲワシ」による鳥葬やアンデス山脈の「コンドル」による鳥葬などが有名である。

チベットの人びとは天葬の習俗を——遺体は細かく切り刻まれ、分解されて、高山地帯の野鳥に与えられる——肉体を他の生物に布施する、自然界に対する寛容の行為とみなす（『同書』p. 130）。

遺体を切り刻むのは鳥葬師と呼ばれる専門家で、骨は砕かれ、ハゲワシに跡形もなく食べてもらうために、麦団子に混ぜて、鳥葬台の上に置かれる。ハゲワシが舞い降り、遺体を食べつくす。食べ終えたハゲワシは、空高く舞い上がり、死者の魂を天に還すと信じられている。平均標高が四千メートルのチベットでは、木が育たず、火葬を行うのは容易ではない。また、岩ばかりの土地で、土葬用の墓穴を掘るのも一苦勞である。鳥葬はそうした自然環境にかなった送葬法である（『世界のお墓』pp. 72-73）。

角川春樹氏の句集、『補陀落への径』の中には、「鳥葬の國——チベット紀行」（pp. 177-203）が収められていて、葬儀を詠んだ句が多くある。

その中の一つ、「天葬」を詠んだ句

天葬の 星降る寺に 秋扇

には、季節が移り、使われなくなったものや時がたって捨てられてしまった人の悲哀は感じられるが、鳥葬のイメージはあまり強くはない。

同じ句集の中には、「鳥葬」という表現を使用した句がいくつかある。チベットの古都、ラサの北部にあるセラ寺で詠まれたものには、

「この裏山なる宝傘山は、今も鳥葬の行はるる所なり。鳥葬は山、草原、砂漠にて行はるるも、一切を天に帰すといふ思想をもつて天葬とも言へり。ラマ僧らは、鷹、鴉等の猛禽のため、死者の人肉を刻むをならひとせり（p. 179）」

という作者の説明が添えられている。

確かに、「天葬」と「鳥葬」が同じものであると説明しているものもあるが、角川春樹氏は「天葬」と「鳥葬」を使い分けているように思われる。上の句は、「天葬」と言っても、猛禽類のイメージはまったく浮かんでこない。むしろ「自然葬」という感じである。それに対して、「鳥葬」ということばが使われている以下の三つの句には、遺体を貪る「ハゲワシ」や「ハゲタカ」の姿が強烈に浮かび上がる。

遠雷や 鳥葬了はる 裏の山  
 補陀落や 人喰い鷹の 太りけり  
 鳥葬の 人肉きざむ 秋の山

「人肉きざむ」は鳥にきれいに食べてもらうためであり、鳥に人肉を「布施」しているのであり、それは崇高な行為であると考えられている。同じように、遺体を他の動物に与える行為が、『死者を弔うということ』(p.130)にみられる。

著者の Sara Murray 氏によると、「肉体を他の生物に布施する」という考えは、ソロモン諸島における古代の慣習にもみられ、死体はサメに対する恵みとして岩の上に放置された、とある。

「鳥葬」は、外国だけでなく、日本でも、古くから行われていたという記録がある。熊野の「八咫鳥」などもその例で、「病苦に苛まれたものたちが熊野の神殿に最後の望みを託して登ってくる。熊野に鳥が繁殖する素地は十分にあった(『補陀落山へ』p.55)」という記述は熊野でも鳥葬が行われていたことを暗示している。

さらに、『今昔物語』の十九卷、「讃岐国多度郡五位聞法即出語第十四」には、鳥葬のことが述べられている。

「引モヤ隠サマシ」ト思ヒケレドモ、此ル人ヲバ只此クテ置テ、「『鳥獸ニモ被噉ム』ト思ヒケル」ト思テ、不動カサズシテ、泣々返ニケリ。

(「亡骸を埋葬してやろう」と思ったが、このような尊い人は、このままにしておこう、『本人も遺体を鳥・獣に施してやろう』と思っていたのかもしれない)と思い直し、そのままにして泣く泣く帰っていった。)

『今昔物語集 2』 馬淵和夫 他 校注・訳 (p.508)

この僧は死んだままの状態では放置されたので、実際に、鳥葬になったかどうかは断定できないが、樹上に置かれたままであれば、人肉を鳥が啄む鳥葬の可能性が高いと推測できる。

さらに、この話は、もともとは人も平気で殺す極悪人が、突然出家をして、僧になり、西方浄土を目指す話に仕上げられてあり、『歎異抄』などにみられる親鸞の「悪人正機説」にぴったりの話になっている。

田中久美子氏の『地獄百景』には、『絵本百物語』より「帷子辻」の絵が掲載されている (p. 95)。嵯峨天皇の皇女であり、絶世の美女、橘嘉智子が亡くなり、遺体は彼女の言いつけ通り、辻に放置された。その絵は、屍体の匂いを嗅ぎつけて舞い降りてきた数羽の鳥が、その遺体を啄んでいる絵、まさに、鳥葬の絵である。

次は、もっとも一般的な火葬を取り上げる。

(3) 火葬：死体を焼き、遺骨を拾って（「骨上げ」をして）葬ること。これもいくつかの種類がある。釈尊が亡くなったとき、荼毘に付されたことはよく知られている。

火葬された場合、拾い上げられた遺骨は、骨壺に入れて、墓に埋葬されるのが普通であるが、火葬後、いくつかの新しい葬法が生じてきた。

① 散骨葬：海、山、川などに散骨し、自然に還すことで、故人に別れを告げる弔い方。散骨しやすいように粉骨をしなければならない。

海に散骨をするケースは特に「海洋葬」ともいわれる。ここでは、「花火葬」と「宇宙葬」について述べておく。

(a) 「花火葬」：散骨葬の一つになるのかどうかかわからないが、花火の火薬に粉骨した遺骨を混ぜて打ち上げる。タイ国などで行われている（『死をめぐる50章』 p. 82）そうである。

(b) 「宇宙葬」：さらに、同じように打ち上げるのであるが、打ち上げる先が単なる空中ではなく、宇宙空間のため「宇宙葬」と呼ばれる。

もう少し詳しく説明すると、2012年、アメリカ合衆国、フロリダ州のケープ・カナベラル空軍基地から「ファルコン9」というロケットが打ち上げられた。このロケットには、18か国320人の遺灰が詰め込まれてあった。遺灰は特殊カプセルに納められて宇宙空間へ打ち上げられたのである（『世界のお墓』 pp. 101-102）。

② 樹木葬：墓地として許可された山の中に火葬後の遺骨を埋め、好きな樹木を植える埋葬の方法。

生前に建てた墓石に刻まれた自分の名前を見て、もちろん、文字はまだ赤く塗られているとはいえ、あまり気分の良いものではない。最近、墓石よりも樹木を好む人も多いというのも理解できる気がする。

「四葬」の最後、「水葬」の前に、特殊な葬儀について触れておこう。

無宗教葬：特定の宗教にとらわれない自由なスタイルの葬儀で、「自由葬」とも呼ばれる。この中には、「お別れ会」・「偲ぶ会」などがある。葬儀会場も、お寺や教会等に

限定されずに、自由に選ぶことができる。例えば、ホテルなどで行うものもある（最近、「ホテル葬」と呼ばれる）。

イギリスでは、「ヒューマニスト葬」と呼ばれ、英国ヒューマニスト協会によれば、「ヒューマニスト葬は来世の存在を認めないが、そのかわりに故人の人生を個性的で愛情を込めた形で追悼する」としている。（『死者を弔うということ』p. 207）

生前葬：本人が元気なうちに、自分の葬儀を自分自身で行う葬儀。縁のある人やお世話になった人を招いて、お礼とお別れを述べるのが目的。本来は出席できない自分の葬儀に参加し、思い通りのやり方で葬儀を執り行うことができる。

羽黒山修験本宗の「秋の峰入り」では、自身がみずからの葬儀を行う「笈（おい）からがき」と呼ばれるものがある。修験者たち一同は、虚飾におおわれ、欲に満ちたそれまでの自分は死んだものと観念しなければならず、死者である自身が収まる棺桶となる「笈」を背中に負うて、山中で修行に専念するという特殊な儀礼である。（『神の山へ』p. 40）

直葬：通夜、告別式などの宗教儀式を一切取り行わず、死後24時間以上安置した後、火葬場へ直行し、荼毘に付し、遺骨は自分たちだけで埋葬する方法。

「四葬」の最後は、水葬。

#### (4) 水葬：遺体を海や川の水中に沈めて葬ること

ヒンドゥー教の儀式の一環として、インド北部、聖地バラナシを流れるガンジス川での水葬が良く知られている。ヒンドゥー教で、「死」は、使い古した肉体を脱ぎ捨てる時。死んで肉体が減んでも魂は生き続け、来世で新しい肉体を手に入れて生まれ変わると考えられている。遺体は荼毘に付され、遺灰を川に流して供養する。ガンジス川は、天国に続く聖なる川なのである（『同書』pp. 66-67）。

また、「乳幼児が亡くなった場合、ヒンドゥー教では、火葬をしないで、聖なる川、ガンジス川に石を付けて沈めるという水葬を行っている。これは、子どもの再生を願ってのことである（『同書』pp. 66-67）」という説明がなされている。

昔、日本でも行われていた可能性はある。例えば、『親鸞と浄土真宗』（p. 59）には、親鸞の有名な話の一つが載せられている。

覚如（親鸞のひ孫）が著した『改邪鈔』によると、遺誡としてこんな言葉も残したと言われる。

「某 親鸞 閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたうべし」

（私が死んだら、その亡骸は鴨川に流して魚の餌にしろ）

しかし、実際には、親鸞の遺誠に残されたように、その亡骸は鴨川に放り込まれたわけではなく、臨終の場には、尋有（親鸞の弟）や覚信尼（親鸞の末娘）らが立ち会い、死後は、鳥辺山南辺で火葬に付され、遺骨は、鳥辺野北辺の「大谷」に収められた（「解説 親鸞とその時代」p.156）。

現在でも、航海中に船舶内で死亡者が出た場合も、船舶法に基づいて海中に沈める、いわゆる、水葬が行われる。

興味深い水葬の形態が、熊野的那智勝浦にあり（あったと言うべきか）、「補陀落渡海（ふだらくとかい）」と呼ばれている。

### 「補陀落渡海」とは？

「秋燕や 補陀落渡海 まぎれなし」

『補陀落の径 角川春樹句集』（p.180）

角川春樹氏は、補陀落信仰の研究に打ち込んでいた父、角川源義氏が、志半ばにして倒れてしまった後、その研究を引き継いで、補陀落の地、チベットを訪れて詠んだ句である。「秋燕」を亡くなった父の霊とみているのだろうか。

この句には、普通の人には、あまり馴染みのない「補陀落渡海」ということばが詠み込まれている。

「補陀落」の話としては、熊野出身の南方熊楠氏の短編「ふだらく走り」（『南方熊楠全集 第5巻』）がある。この短編は、2ページだけの極端に短いものだが、南方氏が、補陀落寺を訪れたとき、そこの過去帳と位牌を写し、那智勝浦から補陀落渡海した上人たちの記録をこの短編に載せている点で、非常に貴重な資料となっている。

しかし、何とんでも「補陀落」を有名にしたのは、井上靖氏の短編「補陀落渡海記」（『日本の文学 71』）であろう。実際、益田勝実氏は、短編「フダラク渡りの人々」が収められている『火山列島の思想』のあとがきの中で、「フダラク渡りの人々」を執筆中に、井上靖氏の「補陀落渡海記」が出て驚いたが、フダラク渡りは、「子孫のわたしたちは、もはやほとんど忘れかけている」どころか、世間周知のこととなったことを指摘し、井上靖氏のここに素材を求められた慧眼に敬意を表している（『火山列島の思想』p.272）。

井上靖氏の「補陀落渡海記」の発表の影響は大きく、多数の小説、短編、研究書や研究論文が出されている。

書名だけでも挙げてみると、「補陀落渡海」（『死の国・熊野』）、「三熊野詣」、『補陀落山へ』、『綱切島』、『補陀落幻影』、「渡海」、「補陀落」（中上健次）、『補陀落』（川村湊）、『観音浄土へ船出した人びと』、『聖地巡礼－熊野紀行』、『日本逃亡幻譚 補陀落世界への旅』、『吾妻鏡』所蔵・智定坊の補陀落渡海」等々、多数のものが生み出された。

その中の一つを部分引用してみようと思う。

闇の中で、母親の声がした。

「こんな子は、もう補陀落へ流しましょう」

祐作はその時、何か悪戯をして押し入れの中に閉じ込められていたのだ。母親はしつ  
けに厳しかった。

「お経が済むまで、そこで静かにしていなさい」

やがて押し入れの外側で、読経の声が聞こえた。祐作は布団の上で大人しく横になって  
いた。

和歌山県東牟婁郡の那智に育った母親は、観音菩薩への信仰が篤く、神奈川県に嫁い  
だあとにも毎日一度、押し入れの脇の仏壇に向かって観音経をあげていた。

<中略>

その時の張りのある読経の声は、今ではもう朧だ。ただ、これだけは今でもはっきり  
と耳底に蘇る……（こんな子は、もう補陀落へ流しましょう）

母親は確かにそう言ったのだ。

補陀落が何か、わからなかった。が、それが二度と帰ってこられない、どこか果てし  
ない海の先にあることだけはなぜか理解した。その言葉の耳慣れぬ響きはいつまでも残っ  
た。そこには漠としたおそろしさがこもっていた。

これは、東野光生氏の小説、『補陀落幻影』（pp. 5-6）の冒頭部分である。「那智」，「補陀  
落」，「流す」，「二度と帰ってこられない」，「果てしない海の先」，「耳慣れぬ響き」など、興  
味を引く言葉が連なる。この主人公、祐作にもあまり馴染のない「補陀落」。「補陀落」とは  
一体何なのか、と「補陀落」の世界へ誘い込む。

この小説の最後で、祐作は、ポンコツ船を購入し、亡くなった親友の遺骨を海に流すこと  
に決めた。

すると、どこかで、懐かしい母親の声が聞こえた。

<こんな子は、もう補陀落へ流しましょう……>

目が開いた。あたりはもう薄暗かった。夢の中で聞こえた声はまだ耳底に揺曳して  
いた。祐作はその声にいざなわれるように、ふと思った。

阿山（亡くなった親友）の散骨を済ませたら、補陀落へ行こう……

船さえあれば、あとは風任せだ。今の季節なら、南へと流れていくことが出来る。  
祐作をこの世につなぎとめるものは、もう何一つなかった。

『同書（p. 192）』



祐作が行こうとしている「漠としたおそろしさがこもっている補陀落」とは一体何なのか？南へ流れていくとは何を意味するのか。

那智は、熊野にある。熊野と言えば、「根の国」、「黄泉の国」、「常世の国」。遙か太古から神々が集う磐座、「花の窟」。「蟻の熊野詣」とまで言われた「熊野詣」に人々を引き付ける「熊野三山」。神の依代であり、ご神体そのものである那智の滝、その大滝と深い森を抱く那智山。太平洋に広がる海の森、熊野灘。山岳修行者の山伏たち。修験道の聖地。そして観音信仰。最も早くから成立した観音霊場巡り、「西国三十三所巡礼」もここ熊野の青岸渡寺が第一札所である。それが熊野。まったくの別世界、異界である。

「そして何といたしても、熊野の一番の特徴は『信不信を選ばず、浄不浄を嫌わず』というところにあります。不信人の者であっても受け入れる、男女の区別なく受け入れる（『聖地巡礼 熊野紀行』p.15）。」

その当時は、「穢れ」とみなされていた「月の物」がはじまった和泉式部の熊野参詣をやさしく受け入れた場所としてもよく知られている。霊場でありながら、信仰上、「穢れ」の多いものとして女性が入るのを禁じた「女人结界」もここ熊野にはない。ふところの広い場所でもある。

そして、ここ熊野、那智勝浦には、興味を惹かれる「水葬」があった。那智の浜から、南方浄土を目指して、渡海する風習があったのである。これが「補陀落渡海」と呼ばれるものである。

「補陀落」というのは、サンスクリット語の Potalaka「ポータラカ」の音写である。従って、「普陀落」とも「普陀洛」とも書かれる。ポータラカは山岳地方のチベットやインドの遙か南の海上にあると信じられている高い山の名前である。そこは、観音菩薩がおられる「観音浄土」であり、「補陀落浄土」とも呼ばれている。

「浄土」にはいろいろあり、代表的なものとしては、阿弥陀如来の「西方浄土」、薬師如来や阿闍如来の「東方浄土」、そして弥勒菩薩の「上方浄土」などがある。

それらの浄土に対して、観音菩薩の浄土は「南方浄土」とも呼ばれて、南に熊野灘が開ける那智勝浦は、南方浄土を目指すには最適の場所であった。

この観音菩薩の「南方浄土」、「補陀落浄土」に魅せられて、その浄土をあえて現世に求め、現身のままで、小舟を仕立てて、太平洋の南方海上の彼方へ、「南方往生」を企てて出て行った僧たちがいたのである。

この実践行、すなわち捨身行が「補陀落渡海」と呼ばれたのである。「補陀落浄土」へ到着したものは、そこで永遠に生きていけると信じられていて、それは、「生死輪廻の此岸より、涅槃常楽の彼岸へ渡る」（『補陀落山へ』p.68）ことを意味していたのである。

この「補陀落渡海」は、『熊野年代記古写』には、868年、慶竜上人が熊野那智浦より渡海したのが最初と記録されているとあり、他に参照できる資料がなく、真意のほどはわからないが、これが語り継がれている（『観音浄土に船出した人々』p.36）。

「補陀落渡海」を決行する人々は、非常に質素に作られた屋形船に乗り込んで、浜を後にし、観音菩薩のお迎えを待ち、観音浄土へ到達できるようにひたすら読経を続けるのである。補陀落船は、浄土へ向かうのにくぐることになっている四つの鳥居（発信門、修行門、菩薩門、涅槃門）が屋形の四方に設置されただけの粗末な船で、まるで棺そのものである。渡海者が屋形の中に入ると、外から板で打ち付けられ、閉じ込められて、出られない。ひとたび、浜から南方浄土を目指して、船出したら、屋形の外に出ることも、二度と浜に戻って来ることもできないのである。万が一、戻ってきても、もう一度流されることになっていた。

井上靖氏の「補陀落渡海」でも、井上靖氏とは別の角度から物語を展開した大路和子の『補陀落山へ』でも、渡海僧、金光坊は、生きながらえて、一度、小島へ上陸した。が、やはり浜へ（現世へ）戻ることは許されず、戻りたいと願う金光坊の意思とは関係なく、見送りに同行した人たちに、無理やり流されてしまうのである。

この補陀落寺の住職金光坊の補陀落渡海が事実だったかどうかは、はっきりわからない。しかし、金光坊が生きのまま打ち上げられた島は金光坊島と名付けられていて、地元では、この島を「こんこぶ」と呼んでいる（『聖地巡礼—熊野紀行』p.107）そうである。

捨身行の水葬は、金光坊の渡海後、改められて、補陀落寺の住職が61歳になっても渡海することはなくなった。その代り、補陀落寺の住職が物故すると、その死体が同じく補陀落渡海と称せられて、浜の宮の海岸から流される習慣となった（井上靖「補陀落渡海」）。そして、金光坊の渡海を見送った弟子、清源の補陀落渡海が生きながらの渡海の最後となった。この話が、吉良幸生氏の小説『綱切島』で、井上靖氏の「補陀落渡海」の続編ともいえるものである。

これと同じような捨身行の渡海は、熊野だけで行われていたわけではなかった。四国の室戸岬や足摺岬、九州の熊本、鹿児島、宮崎、有明海などでも補陀落渡海が行われたという。さらに、その影響は、南方浄土への渡海が無理と思われる日本海の鳥取や島根などにも及んでいる。（『観音浄土へ船出した人びと』pp.120-151）

次の句を見てほしい。

補陀落に 続く径なり 岩鏡 （阿部月山子）

（岩鏡は多年草の高山植物）

『補陀落の径』（p.222）

これは、羽黒山全国俳句大会で、角川春樹氏が特選に選んだ句である。しかし、ここで詠まれている補陀落は熊野の補陀落ではなく、出羽三山の一つ、月山の八合目近郊にある実在の地名である。

『神の山へ』（p.40）で、ここは、「月山八合目から行く御浜・東補陀落、そしてかつての西補陀落や三鈷沢への山駈けには、三山が他界であり、異界であることを実感させるのに

ふさわしい、自然の神秘と不可思議が満ちている」と説明されている場所である。

観音浄土の信仰は、大海原のある地域だけでなくこのような山岳地帯や日光山（二荒山）などでも盛んであった（『観音浄土に船出した人々』 pp. 141-2）。

ここ熊野には「外来の文化を排除しないで、土着のものといっしょにして、そこに新たな信仰の世界を築いてゆこうとする、日本特有の民族性がうかがえるのである（『神の山へ』 p. 124）」という、久保田展弘氏の主張はもともとで、確かに、ここで成立した「神仏習合」は、明治初期の「神仏分離」の時さえ、その精神を失わず、継続されていったのである。

熊野のすごいところは、日本に外来の仏教が伝わったとき、それまで大事に扱われていた、姿なき日本の神々は、その仏教を受け入れたという事実である。それも、外来の仏教を受け入れただけでなく、日本の神は本地である仏・菩薩が衆生救済のために姿を変えて迹を垂れたものだとする「本地垂迹説」が自然に受け入れられていること自体が驚きである。

さて、「水葬」の一つの例として、補陀落渡海を取り上げてみた。普通の水葬と違って、生きたまま流されるのである。渡海僧が、海の遥か彼方の南方浄土に、無事たどり着けるように、海のこちら側では、観音さまにひたすらお祈りをする。

「今は、金光坊さま（渡海された僧）の誓願成就を祈ることほか、何もまともに考えられぬありさまにござります（『綱切島』 p. 201）」と、金光坊の渡海の世話をした清源は答えている。ここ那智では、渡海をした本人も、それを送り出した人も、補陀落浄土での往生を心から願っていたのである。

この清源の祈りは、流した（送り出した）精霊船が無事、極楽浄土にたどり着くことを願う長崎人の祈りと似ている。

数年後、清源は、金光坊の後を追って、補陀落渡海を実行した。この僧もまた、生きたまま渡海船に乗り込み、南方浄土、すなわち補陀落浄土を目指したのである。これが金光坊で終わりとされた「生きたままの補陀落渡海」の唯一の例外であるとして、『綱切島』には書かれてある。

### 「流されるということ」

同じ「流される」でも、次は、精霊（ご先祖さま）が「流される」場合を考えてみたい。

長崎人は、盆の最後の日に、ご先祖さまを供物と一緒に船に乗せて、ご先祖さまがやって来たであろう彼岸へと帰られるよう祈りながら、船を西の海に流すのである。これが「長崎の精霊流し」である。

確かに、補陀落渡海は「生きた人」を、長崎の精霊流しは「亡くなった人の霊」を流すという違いはある。しかし、長崎人は、このご先祖さまの精霊を亡くなった人とは思っていないのである。少なくとも盆の間は、ご先祖さまを亡くなる前の、生きている家族の一員として受け入れているのである。盆の13日は、迎え火を焚いて、深夜まで寝ずに、戸も開けたままで、ご先祖さまの到着を待つ。新たに作った精霊棚には、「迎え団子」が用意されてあ

る。

ということは、長崎の精霊流しは、補陀落渡海と同じように、生きた人を流しているのと同じ感覚なのである。

「生きたまま流す」というのは、非常に残酷な行為である。確かに熊野には、山伏の掟として、峰入の際に大怪我をしたり、病気になった同行者を谷に突き落として捨てるという「谷行」というものがあった。しかし、「補陀落渡海」の場合、観音浄土へ往生することを心から望んでいる者にとっては、残酷どころか、生きたまま極楽往生できる二度とないチャンスであり、浄土十楽の一つ、「蓮華初開の楽」の気分が味わえるのである。

長崎でも、小さいときから、精霊流しを見ている人は、訳も分からずに、将来は、精霊船で流されたいと思っている人が多いはずである。

長崎の初盆は、本当にお金がかかる。それでも、お金に余裕がある人は、精霊船専門の大工さんに船を依頼して、亡くなった人が望んでいた精霊船を作れば良い。そうでない人は、手作りの小さな船でも構わない。時間をかけて、心を込めて作ればいい。亡き人が長崎人であれば、精霊船にどれくらいお金がかかるかわかっているはずだから。爆竹や花火だけでも、普通、10万から20万円はかかる。船を担いでくれる人全員に家紋の入った法被を用意し、家紋入りの提灯も揃える。古式ゆかしくにやろうとすれば、紋付き、袴も必要。何かとお金がかかる。亡くなる人もこのことは十分わかっていて、葬式代は残さなくても、精霊流しにかかる費用は残して死んでいく人が多いと聞く。ここまでして、長崎人が、精霊船を作り、流す意味とはいったいどこにあるのだろうか。

この長崎独特の考え方を理解してもらうためには、少し寄り道をして、まず「死」について考えなければならない。長崎の人が「死」をどう受け止めて、亡くなった人をどう扱っているかを理解してもらわなければならない。少々長い寄り道になるかもしれないが……

### 人が亡くなること

今、世の中は「アンチエイジング（抗老化とか抗加齢化）」の時代だと言っても過言ではない。人間の寿命がどんどん延びて、それに伴い若返り志向が流行している。人は誰でも死にたくないと思い、いろいろな努力をする。だから、死の告知を受けると、人は驚き、まず、「そんなはずはない」とか、「何かの間違いだ」とか、ひたすら「否定」する。

これが第1段階、と分析しているのは、エリザベス・キューブラー・ロス氏（『死の瞬間』pp. 72-73）。第2段階では、「否定」から「怒り」に変わり、さらに第3段階で「神との取り引き」を始めるという。死を回避する方法を必死で模索する段階。それでも死なないという確証は持てないし、「抑鬱」状態に陥るのが第4段階。その状態をなんとか乗り越えてやっと「受容」という最終的な第5段階に陥ると分析している。これがロス氏の「死の受容のプロセス」と定義されたものである。人間というのは、不確かなことに不安を抱き、恐れおののく。不老不死の薬を求めたりするが、それでもいつか「死」は訪れる。

ロス氏は他人が「死」というものをどのように受け止めるかを調査研究しているわけで、それはそれで面白い分析で、姉妹編とでもいうべき『死の瞬間 死にゆく人々との対話』、『「死の瞬間」をめぐる質疑応答』、そして『「死の瞬間」と臨死体験』も同じような研究内容である。死にゆく人へどのように対処していくかが、質問と回答の形で述べられている。ロス氏の研究の高い評価は、医者である彼女が、科学で証明し難い「臨死」の分野に取り組んだことであろう。

しかし、日本の歴史を遡ると、同じようなことをすでに行った僧がいる。『往生要集』を著した僧、源信は、臨終を迎えようとしている人々に、今でいう、インタビューを行い、今、どのようなヴィジョンが現れているかを聞き、それを自ら記録し、弟子に記録させているのである。それが998年に「横川首楞嚴院二十五三昧起請」（『弔いの文化史』）として、まとめられているのである。

残念ながら、ここでは、それを詳しく見ていくことはしないが、2冊の本を紹介したい。それらは、「死」を宣告され、それでも「死」と闘いながら、「死」を見つめたものである。

一冊目は、井村和清氏の『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』。以前、読んだことがある本で、映画化もされ、映画も見ることがある。

青木新門氏が『納棺夫の日記』の中で、井村和清医師の遺稿集を取り上げていたのには、正直驚いた。

「それでも、なにげなく読み始めて、気が付いたら正座して読んでいた。読み進むうちに、涙で目がくもって読めなくなった（『納棺夫の日記』 p. 63）」と、ある。

さらに「人は死と対峙し、死と徹底的に戦い、最後に生と死が和解するその瞬間に、あの不思議な光景に出遭うのだろうかと思った。人が死を受け入れようと決心した瞬間、何か不思議な変化が生じるのかもしれないと思うようになった（『同書』 p. 65）」と続けている。

そしてさらに、「死と和解した死者が静かで美しく見え始めて、それ以降、死者の顔ばかりが気になるようになっていた」と、ある。『納棺夫の日記』を読み終えたあと、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』を再度、読んでみた。

患者の死と直接向き合うことの多い井村医師が、自分の死を見つめて、三歳の子、飛鳥へ、そして、もうすぐ生まれてくるわが子へ、手記を書き残し、この世を去った。臨死体験談よりもはるかに心打たれる、本物がそこにあった。

もう一冊は、宗教学研究者である岸本英夫さんの著書『死を見つめる心 ーガンとたたかった十年間』。こちらは、外国の病院で、外国人の医師に癌を宣告され、悪性腫瘍のため、半年の命しか保証しないと告げられた後の、闘病日記である。生命の飢餓状態に置かれて、死を見つめて懊悩煩悶する自分の姿を想像し、ひたすら研究に打ち込むことによって、常に死と対面しなければならない毎日を家族に支えられながら、ひたむきに、しかも本人は冷静に、半年と宣言された余命を10年間にも引き延ばして、ひたむきに生きてきた態度には頭が下がるばかりである。

『仏教ではこう考える』(p. 39)の中に、「死は単に個人だけの現象ではなく、そこに関係する人々もゆすぶります」というのがあるが、確かに、死にゆく人よりも、その近い人の方が、動揺している場合が多い。

宮沢賢治の場合はまさにそうで、自分の死というものは、冷静に、他人事のように受け止めている：

だめでせう

……… <中略> ……………

どうも間もなく死にさうです

けれどもなんといい風でせう

……… <中略> ……………

こんなに本気にいろいろ手あてもしていただければ

これで死んでもまづは文句もありません

……… <中略>……………

あなたの方からみたらずいぶんさんたんたるけしきでせうが

わたくしから見えるのは

やっぱりきれいな青ぞらと

すきとほった風ばかりです。

「眼にて云ふ」(『疾 中』 宮沢賢治)

これが、賢治のすぐ下の妹、トシの死になると冷静に受け止められない。むしろ、死にゆく妹の方が兄、賢治を落ち着かせようとしている気配りさえ感じられる。

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

………<中略>……………

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

………<中略>……………

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ  
 みなれたちやわんのこの藍のもやうにも  
 もうけふおまへはわかれてしまふ

……………＜中略＞……………

おまへがたべるこのふたわんのゆきに  
 わたくしはいまこころからいのる  
 どうかこれが兜率の天の食に変つて  
 やがておまへとみんなとに  
 聖い資糧をもたらすことを  
 わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

「永訣の朝」(『心象とスケッチ 春と修羅』 宮沢賢治)

人間が死ぬと、「身体は減びる。しかし魂は残る。だから意識は不滅だ」という理論(『死の壁』 p. 29)が、当たり前だったときは、死後の不安も少なかったのかも知れない。今、多くの方は、「身体が減ぶと、魂も消滅。当然、意識も減んでしまう」と考えていると思われる。岸本英夫氏の場合も、「肉体の崩壊とともに、『この自分の意識』も消滅するものとしか思われぬ。私自身は死によって、この私自身というものは、その個体的意識とともに消滅するものと考えている」(『死を見つめる心』 p. 20)とはっきり述べている。

しかし、一般の人には、それだけの決意は、なかなか持てない。生への執着の方が断然強く、死んでしまうとどうなってしまうのだろうかという不安が、次第により募ってくる。死後の行く先など本当に存在するのだろうか。

### 死者の行く先

人は死ぬとどこへ行くのでしょうか。子供たちにどう教えたらよいのでしょうか。金子みすゞは次のように答えている。

蚕は繭に はいります、  
 きゅうくつそうな あの繭に。

けれど蚕は うれしかる、  
 蝶々になって 飛べるのよ。

人はお墓へ はいります、  
 暗いさみしい あの墓へ。

そしていい子は 翅が生え、  
天使になって 飛べるのよ。

金子みすゞ 「蘭と墓」(『金子みすゞ詩集』)

西洋の子供たちも、こう教わるのだろうか。いい子は天使になって、あるいは、天使に導かれて、天国へ飛んでいく、いや、天国へ飛んでいくことが出来るのだと。

世の中、いい子がいれば、いけない子もいる。いけない子はどうなのだろう。

日本の場合、どうだろうか。『補陀落幻影』の祐作のお母さんみたいに、「こんな子はもう補陀落へ流しましょう」と、どこかへ流されるのであろうか。それとも外国と同じで、「そんな事をしたら、地獄へ墮ちるよ」と脅されるのであろうか。

長崎では、「悪いことしたら、久助どんが来っとぞ」(「鬼ん池久助どんの連れん来らるばい!」『島原地方の子守り歌』)とよく脅された。それよりも、「そげんことしたら、地獄に墮ちるとぞ!」といわれる方が、何かわからない、それこそ、「漠とした怖さ」があった。

特に、地獄は、炎とか針の山とか煮えたぎった池などがあって、閻魔大王が地獄の鬼、獄卒たちを従えて、われわれがやってくるのを待ちかまえているイメージがあった。

### 「天国と地獄」と「仏国土(浄土)と地獄」

このように、われわれを怖がらせ、脅し文句に使われる地獄は、いったい誰が作り上げたのだろうか。

キリスト教の死後の世界は基本的に天国と地獄の二極構造。神の愛に満ちた至福の世界「天国」と生前に大罪を犯した者が行く永遠の責め苦が続く「地獄」。その他に、キリスト教が根本的に抱える問題を解決するために妥協の産物として作り上げられた「辺獄」と「煉獄」。

「辺獄」は、洗礼前に亡くなった嬰兒やキリスト教成立以前に生まれた偉人たちが行くところ。一定の期間が過ぎたら、イエス自らが天国に誘いに来るといふ。

「煉獄」は、信仰心が足りなかったり、小さな罪を積み重ねたりしたものが天国に行くために、魂の浄化を行っている場所のことである。5世紀ごろ、アウグスティヌスによって、その存在が示唆され、ダンテによって確立されたと言っても良いであろう。

しかし、イギリスでは、ヘンリー八世がイギリス国教会をローマ・カトリック教会から分離させたときに「煉獄」は廃止された。プロテスタントでは、人間は罪人(つみびと)であるという立場を取っているので、「煉獄」は認めていない。現在、「煉獄」を正式に認めているのは、カトリックだけである。

人は死ぬと、天使がやって来て、その魂を天にいる神のもとへ送る。その後、神による最初の裁きが下され、その魂は、天国か地獄か、辺獄か煉獄かに送られる。

一方、この世の終わりである「最後の審判」のとき、この時点で生きている人間はすべて、一度死に、そして復活する。これまですべての死者も復活し、生身の肉体をもってイエスの



前で最後の審判を受けて再び、天国か地獄に振り分けられる。このように、キリスト教では、人間は二度、裁かれるのである。

ローマ・カトリックの熱烈な信者、ダンテ・アリギエールが書いた『神曲』は、それまで放蕩な生活を送ってきたダンテが暗い森の中で目覚めるところから始まる。そこで、古代ローマの詩人、ウェルギリウスに出会い、彼の道案内で、「地獄」、「煉獄」、「天国」を旅することになる。

「この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ」と警句が刻まれた「地獄の門」をくぐり、「三途の川」にあたる「アケロン川」を渡し船に乗って向う岸へ渡り、もともとは大天使であったサタンがいる「地獄」へと進んで行く。地獄から「煉獄」へ上り、ここで、天界へ向かうのだが、ウェルギリウスは異教徒のため天界には入れない。そこで、案内者がウェルギリウスからダンテの最愛の人だったベアトリーチェに変わる。

ジョン・ミルトンによって書かれた『失樂園』は、清教徒革命、チャールズ一世の処刑、クロムウェルの共和制、王政復古と目まぐるしい事件が次々と起こった時代の作品である。

神に戦いを挑んで敗れた大天使ルシファー（サタン）が、暗黒の世界（地獄）で目覚めるところから始まる。ルシファーは多くの天使たちを集めて、天国を神の手から奪うために立ち上がる。神は、大天使ミカエルを総大将とした軍によって、ルシファー軍を迎え撃つ。戦いは苛烈を極め、一進一退の攻防が続く。神が強烈な雷（いかずち）をルシファーめがけて放つと、勝敗が決した。神の一撃を受けたルシファーは仲間の天使とともに、暗黒の闇に落下し、まだカオスであった大地に突き刺さる。この時、大天使ルシファーは墮天して、地獄の覇王サタンに生まれ変わる。

ここから、サタンの神への復讐劇が始まる。サタンは、神との再戦を前に、神の新たな創造地エデンを奪い取る計画を立てる。そこに住んでいる人間の祖先である神の新たな創造物を墮落させて、自分の方に引き込むことを画策する。

人間の祖先であるアダムとイブは、永遠の楽園、エデンの園で幸せに暮らしていた。そこへ現れたのがサタンの変身した蛇。イブを唆して知恵の実を食べさせる。イブは知恵を得て、夫、アダムにも食べさせる。こうして人間は知恵を得たが、そのことを知った神は、二人をエデンから追放する。神の子イエスは、アダムとイブが犯した原罪を償うために自己犠牲になるという、キリスト教の教えの本質が描かれたストーリーになっている。

西洋では、死後の世界を「天国」、「辺獄」、「煉獄」、「地獄」と分けており、特に、「地獄」は、非常に細かく、詳しく、恐ろしく描かれている。

——— 地獄に行きたくなければ清く正しく生きなくてはならない。

この「地獄行き」という脅し文句は、洋の東西を問わず、人々の生活に道徳的な規律をもたらしました。おそらくそれは「天国行き」以上に効き目があった言葉だと思われます。

「天国へ行きたい」と願うのはもちろんですが、まずは「地獄に行きたくない」と考えるのが人の心というものでしょう。

(田中久美子『地獄百景』p. 3)

日本で、「地獄の怖さ」を伝えたのは、臨終の人に現れるヴィジョンを研究した、あの源信という平安時代の僧である。彼は、『往生要集』を著して浄土教の理論的基礎を築いたと言われている。彼の著書は、のちに、地獄絵として描かれ、閻魔大王、屈強な獄卒、炎や血しぶきなどは、身の毛もよだつ「仏教の地獄観」を示し、日本人は、まだ見ぬ「地獄」に対する恐怖心を心底に植え付けられてきた(『同書』pp. 16-17)。地獄に堕ちたくなければ、信仰に向かうしかない。「念仏に専念すれば極楽往生できる」という源信のことは生きてくる。

日本の地獄観は、六道輪廻と深く関係しているので、こちらは後述することにして、ここでは、西洋の死後の世界、亡くなって、最後の審判を待っている人たちがどのようにしているかを見てみたいと思う。

西洋の子供向けに、死んだ人たちが普段、どのように過ごしているかを描いた本がある。西洋の子供たちに死後の世界を安心して見せられるものである。

ベルギーの作家、Maeterlinck が書いて、世界中で受け入れられ、ベストセラーになった *L'Oiseau bleu* (『青い鳥』)。(ここでは、英語に翻訳された *The Blue Bird* を使用している。)

この中で、Tytyl と Mytyl は “The Land of Memory” へ行き、祖父母と再会することができる。その時の祖母 Granny Tyl と孫 Tytyl の会話の重要な点が、まさに「生きている人が死者のことを思い出す」ことにあることがわかる。

GRANNY TYL

We are always here, waiting for **a visit from those who are alive**.... They come so seldom!... The last time you were here, let me see, when was it?... It was on All-Hallows, when the church-bells were ringing...

TYLTYL

All-Hallows?... We didn't go out that day, for we both had very bad colds....

GRANNY TYL

No; but you **thought of us**....

TYLTYL

Yes....

GRANNY TYL

Well, every time you **think of us, we wake up and see you again**....

TYLTYL

What, it is enough to....

GRANNY TYL

But come, you know that....

TYLTYL

No, I didn't know....

今度は、Tylytl と祖父 Gaffer Tyl との会話が続く

TYLTYL

Do you **sleep** all the time?...

GAFFER TYL

Yes, we **get plenty of sleep**, while waiting for **a thought of the Living to come and wake us**.... Ah, it is good to sleep when life is done.... But it is pleasant also to wake up from time to time....

TYLTYL

So you are not really dead?...

GAFFER TYL

What do you say?... What is he saying?... Now he is using words we don't understand.... Is it a new word, a new invention?...

TYLTYL

The word "dead"?...

GAFFER TYL

Yes, that was the word.... What does it mean?...

TYLTYL

Why, it means that one's no longer alive....

GAFFER TYL

How silly they are, up there!...

TYLTYL

Is it nice here?...

GAFFER TYL

Oh, yes; not bad, not bad; and....

と、続いていく。

この“The Land of Memory”にいる彼らは、「眠っているのであって、死んでいるわけではない」と作者は考えている。少なくとも、この物語を読んだ子供達にはそう伝わる。

日本でも、そのような考えをしている人はいると思われる。例えば、前述の『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』の著者、井村医師も、死にゆく自分を見つめつつ以下のように表現している。

人の心はいいものですね。思いやりと思いやり。それらが重なり合う波間に、私は幸福に漂い、眠りにつこうとしています。幸せです。

ありがとう、みなさん、ほんとうに、ありがとう。

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』(p.22)

「眠りにつく」という考えは、キリスト教徒やイスラム教徒などにみられる考え方、「死んだのではない、最後の審判を待つために眠りについたので」(『仏教ではこう考える』p.139)と同じ考えである。キリスト教徒やイスラム教徒が、火葬を極度に嫌う理由がここにある。

Tyltyl と Mytyl は、亡くなって、この国にいる三人の弟と赤ん坊だった妹のことも「思い出す」。すると、眠っていた彼らも目覚めて再会できる。

Alex Shearer というイギリスの作家が書いた、*The Great Blue Yonder* という小説がある。この物語は、自転車に乗って出かけたハリーという少年がトラックとの事故で、突然死んでしまうところから始まる。彼はまず、“the Other Side” (日本でいう「浄土の仮のすまいである辺地」のような所と考えればわかりやすい) に送られて、そこから、“the Great Blue Yonder” (天国) に行く順番待ちをしている。ただ、彼は、“the Land of Living” (現世) でやり残したことがあるので、そこに行く前に、幽霊となって地上に戻り、やり残したことを何とかやり遂げて、“the Other Side” に戻って来る。地上に降りてみて、家族が毎日、自分のことを思い出して、墓参りに来てくれるのを知り安心する。やっとのことで、“the Great Blue Yonder” に向かうことができる。ここでも、生きている人が死者を「思い出す」ことの重要性が描かれている。

井村医師も、「幼い飛鳥を抱いていると、胸が一杯になってくる。幼いから、恐らく将来父親の思い出は持てないだろう。僕のことなど覚えていよう筈がなかろう。とても辛い。幼い飛鳥を残していくなど、とても辛い。せめて、この抱かれたイメージだけでもその幼い脳裏に刻みこんでおいてほしい。そして時には、思い出してほしい」(『同書』p.149) と、本心から願っている。

果たして、飛鳥ちゃんはどのようなときに、亡くなった父を思い出すのであろうか。また、われわれ日本人は、死者のことを思い出す機会はどれくらいあるのだろうか。

### 「死者の寿命」が短くなっている

釈徹宗氏は、いろいろな著作の中で、最近、「死者の寿命が短くなっている」と力説され

ている。生きている人間が亡くなった人を忘れてしまうことである。死者の法要も、「三十三回忌」、柳田國男風に言えば、「とぶらい上げ」（『先祖の話』p.197）が、最後の法要になるのが一般的で、それ以降、死者はほぼ完全に忘れられてしまい、もう思い出されることもない。死者の寿命を引き延ばすには、それ以降も祭祀儀礼を続けることが大事であるという。そのような意味で言えば、日本の仏教の場合、外国に比べると、亡くなった人を「思い出す」機会はかなり多いと思われる。

仏教も宗旨による違いはあるとしても、人が亡くなると、死者儀礼として、「枕経」（臨終勤行）、「お通夜」、「葬儀」、「告別式」、「火葬」、「お骨上げ」、「初七日法要」、「二七日（ふたなぬか）法要」、「三七日法要」。そして死者追善の最大の法要となる「四七日（満中陰）法要」を営む。以上のように中陰法要だけでも、これだけの回数がある。これで、喪に服する期間が終わり、「忌明け」となる。

ただし、浄土真宗では、死者は、すぐに成仏するので、納棺の際も、冥土の旅支度として「死装束」着せたり、三途の川を渡るための「六文銭」を持たせたりもしない、戒名も法名であり、「友引」などの吉凶もない。（『親鸞と浄土真宗』p.103）。

中陰法要は、現世で残された人が行う追善供養であるが、死者にとって、この冥土の旅は辛く厳しい。死天の山の険、三途の川の急流をこえる。衣服は奪衣婆によって剥かれ、十王巡礼の長い道程がはじまる。（高橋洋二 編『地獄百景』p.36）

十人の王による具体的な「冥土の裁き」は、『同書』（pp.38-43）が非常に詳しいので、こちらを参照されたい。

中陰の最終的な泰山王の裁きでも結審がつかない場合は、さらに、平等王の裁きがあるので、現世では、そのための「百ヶ日法要」を営むことになっている。これ以降は、年忌法要（一般的に「法事」と呼ばれている）に移り、都市王の裁きに備えて、「一周忌法要」を営む。それでも結審がつかなければ、十王の最後の王、五道転輪王の裁きが待っている。それに備えて、現世では「三回忌法要」を念入りに行う。この10回の法要は、冥界の王の審判のときに、遺族の追善供養による功德で、死者の審判を有利に導いてくれるようお願いしているわけである。

この冥界で死者を裁くのは、厳めしい王たちであるが、本来の姿は「仏」である。順に、仏名を挙げていくと、秦広王は「不動明王」、初江王は「釈迦如来」、宋帝王は「文殊菩薩」、五官王は「普賢菩薩」、閻魔王は「地藏菩薩」、変成王は「弥勒菩薩」、泰山王は「薬師如来」、平等王は「観音菩薩」、五道転輪王は「阿弥陀如来」である。仏は何度も転生を繰り返す愚かな人間を諫めるために、わざと恐ろしい姿を装いあえて厳しい罰を与えているのである。その後も、「七回忌法要」、「十三回忌法要」、「十七回忌法要」、「二十三回忌法要」、「二十七回忌法要」、「三十三回忌法要」と続き、一般的にはここで「弔い上げ」とし、寺への寄進や永代供養を行う。しかし、菩提寺の住職の話では、「五十回遠忌」や「百回遠忌」など供養を行った例も多々あるということである。「五十回忌」や「百回遠忌」になると、血縁関係

はあったとしても、もしかしたら、顔も見たことのない先祖の法要となることもあるだろう。道理で、「五十回忌」の法要になると、もうお祝いで、仏飯も赤飯になり、ローソクも赤いものが使われるそうである。ここまで自分たちのことを思い出してもらえたら、ご先祖さまもさぞかしご満足だと思うがどうであろうか。

仏教の場合は、死者を「思い出す」機会が数限りなくあるし、自宅に仏壇が置かれている場合が多いので、毎朝、毎晩、手を合わせることで、亡くなった人を思い出すことができるのである。子どもを亡くした親の方も、子どものために、現世の河原で石を積み上げ塔を建てるという供養を行っているところがある。そうした「現世の賽の河原」が存在する。前出の青森県の「恐山の賽の河原」があまりにも有名だが、日本全国に点在している（佐渡島、那須温泉神社、鳥取県大山など）。このように現世でも、親は、亡くした子どもを思い出しながら、子供への供養をしているのである。

19世紀のイギリスの作家、ジョージ・エリオットの言葉：Our dead are never dead to us, until we have forgotten them: (*Adam Bede*) (死者が本当の死者になるのは、われわれが彼らをまったく忘れてしまった時である)

### 輪廻転生

アメリカ人俳優 Brad Pitt 主演の映画、*Seven Years In Tibet* には、輪廻の話が登場する。‘The reincarnation of Avalokiteshvara, the Bodhisattva of Compassion’ (阿弥陀菩薩の生まれ変わり) である Dalai Lama から、映画館建設の依頼を受けた主人公ハインリヒ・ハラー (オーストリア人) は、基礎工事が遅々として進まない現場に足を運ぶ。ところが、工事を着手しているはずの男たちがミミズをつまんで騒いでいるところに出くわす。

“What is the problem? What is the problem here?” とハラーが尋ねると

“Worms. Please, no more hurting worms. Please.” との答えが返る。

“Worms?” と驚いて聞き返す。訳の分からない彼に次の言葉が返る。

“In a past life, this innocent worm could have been your mother. Please, no more hurting. It’s impossible. Please no more.”

西洋人のハラーには理解しがたいことである。このことを Dalai Lama に話すと、彼は「輪廻転生」と「不殺生戒」を説明してくれる。

“Tibetans believe all living creatures were their mothers in a past life. So we must show them respect and repay their kindness. And never, never harm anything that lives. You can’t ask a devout people to disregard a precious teaching.”

それでも、ハラーは「すべてのミミズを救っていたら……」と、次のように詰め寄る。

“But we can’t possibly rescue all the worms, not if you want the theater finished in this lifetime.”

それに対して Dalai Lama はこう切り返す。

“You have a clever mind. Think of a solution.”

ハラーが「輪廻」のことを十分に理解したかどうかは、映画では触れられていないが、どんな生き物の殺生も可能な限り避け、慇懃に生きることをこころがけているチベット人たちの信念は、西洋人のハラーにも理解できたのではないだろうか。掘り出されるミミズはすべて別の場所で、丁寧に土の中に返されていた。

西洋においても、「生まれ変わり」という考え方をしている人もいる。フランスの作家、アンヌ・フィリップ（フランス人の俳優、故ジェラルド・フィリップの妻）は、自分の孫を自分の母親の「生まれ変わり」と考えており、彼女の小説、『母、美しい老いと死』には、その考えを裏付ける表現がたびたび登場する。例えば、「生まれてきた赤ん坊と死んでいく母の似ている点を考えた（p. 60）」、「母は逝き、赤ん坊がやってくる（pp. 95-96）」、「母は死に、子供が生まれ（p. 114）」、「母はこの世での旅を終え、赤ん坊はその旅をはじめののだ（p. 123）」などは、生まれてきたばかりの孫が、死んでいく母の生まれ変わりだと信じている表現である。

さて、前に紹介した映画で見られるような輪廻転生の考え方は、これから述べる「六道」と深くかかわっている。

## 六道輪廻

先ほど述べたように、キリスト教で、天国と地獄の観念を確立したのは、ダンテの『神曲』とミルトンの『失樂園』であると言える。

仏教でその天国と地獄に対応するものは、「浄土」と「穢土」であると思われる。この観念が広く行き渡ったのは、平安時代中期の天台宗の僧、源信であるといっても過言ではない。源信は、『往生要集』を著し、人は死ぬと、如来が創った清らかな国である「浄土」に行くか、「浄土」と対極に位置する「穢土」に行くかのどちらかであるとしている。

ここでの「浄土」とは、一切の煩惱や穢れがない世界で、仏や菩薩が住む清浄な国土という意味である。

源信は「浄土」のことについても、極楽往生の「十の楽しみ」を説いている。例えば、臨終の際、阿弥陀如来が多く菩薩と共に紫雲に乗って迎えに来るという「聖衆來迎の楽」や多くの菩薩や聖人たちと親しく交際できるという「聖衆俱会の楽」など、合わせて十の楽を得ることが出来るとする。ここでも、源信の「念仏に専念すれば極楽往生できる」が効いてくるようになっている。

一方、キリスト教の「地獄」に関して言えば、ダンテは『神曲』で罪人などが激しい責めによる肉体的な苦痛を描き、ミルトンは『失樂園』で絶望感や喪失感など精神的な苦痛を描いている。この両者が一つになり、キリスト教の地獄観を作っていったと思われる。

一方、仏教の場合、「穢土」とは、煩惱を捨て去ることのできない衆生が住む世界の総称で、『往生要集』では、「天道」、「人間道」、「阿修羅道」、「畜生道」、「餓鬼道」、そして「地獄道」の六つの世界があり、六道と呼ばれている。源信は、悪人は、苦しみの待つこの六道輪廻を巡るとし、ここから解脱し、浄土への往生を願うことの重要性を説き、そのためには念仏が必要なことを力説している。

ここで、「六道」がどのようなところか、田中久美子氏の『地獄百景』（pp. 88-107）にそって、一つ一つ確認してみよう。

「天道」：六道の最上層にある「天人の世界」であり、生前に最良の善行を積んだ者のみが転生する。ここでも寿命があり、完全に解脱するまでは転生を繰り返す。天で墮落した生活を送れば、天人といえども来世は地獄に堕ちかねない。あくまでも修行の場である。

天人の世界にも救いの菩薩が現れる。それが如意輪観音である。

「人間道」：天道に次ぐ幸せな世界とされ、生前に善行をなした者が行けるのだが、そこは、不浄で苦しみに満ち、確かなものなどない不安定な世界である。そこに住む人間は、仏法を学び、悟りを目指すことが出来る。

准胝観音（天台宗では不空罽索観音が代わりを務める）が、救いの手を差し伸べてくれる。

「阿修羅道」：天道・人道について善行をなした者が送られる世界。もともと、天道にいた阿修羅王は、帝釈天に歯向かったため一族は、天道を追われて、海底に墮とされた。阿修羅道に転生したものは、阿修羅の一族として、転生するまで、戦いに明け暮れなければならない。

阿修羅道で苦しむ人たちを助けるのは「十一面観音さま」である。

「畜生道」：ここからは、悪行をなした者が墮ちる世界であり、餓鬼道・地獄道とともに「三悪道」を成す。脱出困難な弱肉強食の世界である。

畜生道で苦しむ人々を救うのは、「馬頭観音さま」である。

「餓鬼道」：もっとも地獄に近い。「餓鬼道」に墮ちるのは、欲深く物惜しみをし、嫉妬深い者である。決して癒されることのない飢えと渇きに苦悩する世界である。

餓鬼道で苦しむ人々を救うのは、「聖観音さま」である。

「地獄道」：六道の中で、最下層に位置し、極悪非道の者が墮ちる世界で、それぞれの罪に応じた、灼熱の地獄の「八大地獄」や「八寒地獄」で悪人を待ち構えている。

救いのない地獄道の世界にも、観音様は「千手観音さま」に姿を変えて、苦しむ人たちを助けてくれるのである。

この「六道輪廻」の考えは、日本でも古くから受け入れられ、『日本霊異記』にも人間か



ら畜生道に生まれ変わった話などが登場している。たとえば、

前世で子供のものを盗んで返さなかったため、死後、牛に生まれ変わり、その子のために働かされる話（『同書』上巻第十）

行基大師が子を連れた女に、その子は前世でその女の敵であったことを教え、子を捨てさせる話（『同書』中巻第三十）

村人が死んで、犬に生まれ変わり、キツネが生まれ変わった禅師の弟子を食い殺す話（『同書』下巻第二）

東天竺国の大王が死後、猿に生まれ変わった話（『同書』下巻第二十四）などなど。

さらに、前出の南方熊楠氏は、「ふだらく走り」の中で、補陀落渡海を実行した僧が魚に生まれ変わった話を紹介している。

「かく死に切らぬうちに水葬された僧の亡霊が、ハマチとスズキを混じたようなヨロリという魚に生まれ、三木の崎と潮の岬の間に限って棲む、と聞いた」（p. 402）。

井上靖氏の短編では、この「ヨロリ」という魚は、渡海した上人の霊が生まれ変わったもので、三木の岬と潮ノ岬の間にしか棲んでいず、土地の人は、この魚を捉えてもすぐ海に戻してやり、決してそれを食用にすることはなかった、という話にしている。

ただ、南方氏は、このヨロリという魚が「三木の崎と潮の岬の間に限って棲む」というのは、間違いだと他者から指摘されて、自分の過ちを訂正していることも書かれてある。

生前の行いの報いによって、死後、六つの世界のどれかに転生する（生まれ変わる）。そして解脱することができるまで、転生を繰り返し続ける。

しかし、ここでも、観自在菩薩が現れて、その人その人の苦しみに応じて、自在に変化して、六道に堕ちた衆生に救いの手を差し伸べてくれるのである。

例えば、明治初期に河鍋暁斎の『地獄極楽めぐり図』は、幼児の臨終とともに、阿弥陀如来三尊が来迎し、幼児を連れて、墓所から賽の河原に立ち寄り、閻魔王の案内で恐ろしい地獄を見学し、当時、話題となっていた蒸気機関車で極楽へ到着するという旅物語を絵に描いたもので、幼い命を落とした子供への追善供養の書となっている。（高橋洋二 編集『地獄百景』）

この六つの道の一番下の層に位置するのが、地獄道でここからはなかなか抜け出すことのできない恐ろしい世界として説明されている。

日本で「地獄の恐ろしさ」を人々に知らしめたのは、源信であることは確かであるが、源信の地獄の観念が大衆に知れ渡ったのは、何と言っても、『六道絵』や「往生要集絵入版本」などの地獄絵であった。

地獄での苦しみが視覚的に表現され、地獄の怖さが何倍にも増幅された。「地獄に堕ちたらあのように苦しめられる」と人々を震撼させ、「地獄には何としても堕ちたくない」と思

わせ、最終的には、人々を欣求浄土へ誘う信仰に向かわせることになるのである。

### あの世からのしばしの帰宅

先祖の霊（祖霊）がこの世に来る日は「魂祭り」と呼ばれて、平安時代には年に数度あった。例えば、大晦日の深夜に祖霊が訪ねてきて、元旦の早朝に去る、ということが信じられていた（『盂蘭盆経を読む』p. 71）。

松原泰道氏は、同書で、都（京都）ではなくなってしまった「魂祭り」が、関東の方では、まだ残っていたことに驚く吉田兼好の話を『徒然草』の中に見出している。その個所を原文のまま引用すると：

晦日の夜はいたう暗きに、松どもともして、夜中過ぐるまで、人の門叩き、走り歩きて、何事にかあらむ、ことごとしくののしりて、足を空に惑ふが、あか月よりさすが音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。なき人の来る夜とて魂祭るわざは、この此都にはなきを、東の方には、猶することにてありしこそ、あはれなりしか。

『方丈記 徒然草』第十九段 (pp. 97-98)

「晦日の夜はいたう暗きに」は、太陰暦の晦日であるから、天気が悪くても月は出ていない。太陰暦では、月の形でその日が何日かを推測できたのである。

「魂祭り」のような、先祖の霊を迎え、そして送る行事が、まず、京の都でなくなり、兼好法師が生きていた時代はまだ残っていた関東の方でも、今日では廃れてしまったのは非常に残念ではある。このような行事が残っているものとしては、唯一、盂蘭盆だけになってしまった。

現在、一般的に8月13日から15日に行われる盂蘭盆は、もともとは太陰暦7月15日の一日だけであった。その日は、雨季の時期の90日間を一定の場所に籠って修行する安居の最後の日で、「自恣の日」である。また、目連さんの母親が多くの僧の助けのお陰で、餓鬼道の苦しみを出ることができた「仏歡喜の日」でもある。

釈尊はその場に集まっている弟子や、釈尊の説法を聞こうとしている多くの人びとに、次のようにお告げをなされた。

「あなた方が仏弟子として、よく親に仕え、孝行の誠を尽くそうとする者は、常に父母を憶い浮かべて、生みの親から遠い遠い両親——ご先祖のあることを忘れずに、年々七月十五日に盂蘭盆の供養をするがよい」（『盂蘭盆経を読む』p. 167）。これが盂蘭盆のはじまり。

その後、民間信仰の「魂祭り」などと混ざり合って、15日の前後が加えられ、太陰暦の7月13日から7月16日になっていったようである（『同書』pp. 70-73）。

## 太陽暦の弊害

明治政府の太陽暦採用で、日本の様々な行事が太陰暦から太陽暦への移行を余儀なくされた。そのために季節に合わない行事も少なからず生じてきた。例えば、習い事の上達を願った「七夕祭」。兼好法師が

七夕祭こそなまめかしへれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴て来る此、萩の下葉色づくほど、早田刈り乾すなど、取り集めたることは秋のみぞ多かる。

と、『徒然草』第十九段で描写しているように、「七夕祭」は秋の行事であった。

明治になって、それをそのまま、太陽暦の7月7日に移行したので、梅雨空の場合が多く、「織女星（こと座のベガ）」も「牽牛星（わし座のアルタイル）」も「天の川」も見ることが稀になってしまった。この季節のズレを失くすために、8月7日に「月遅れ」の行事として行っているのが仙台の七夕祭。が、しかし、それでも、七夕伝説で重要な役目を果たす「月」の存在を忘れている。新月から七日目の月は、半月で舟の形をしていて、牽牛星を乗せて、天の川を渡って、織女星のところまで送り届ける役割を果たしている。「月の船」なしで、牽牛星はどうやって天の川を渡るというのだろうか。

江戸時代の長崎では、六日の夜は、「待夜」と言って、七夕の「前夜祭」が行われていた。寺子屋や芸事の先生の家を集まってご馳走に預かるという、楽しい夜を過ごした（『楽 長崎四季ごよみ』）。詩歌や俳句の会なども催されたようで、秋の夜空の星や月を楽しんだものと思われる。やはり、月は、欠かせないのである。

太陰暦の七夕を守っているのは、京都の冷泉家。ここでは、七夕行事は乞巧奠（きっこうてん）と呼ばれて、秋の七草（萩、薄、葛、女郎花、藤袴、朝顔、河原撫子）が咲き乱れる初秋におこなわれる。「乞巧奠」の「乞」は乞い願う、「巧」は巧み、「奠」は祭事、の意味で、牽牛と織女の二星に供物を捧げ、蹴鞠や雅楽や和歌など諸芸の上達を祈るのが、「乞巧奠」の起源とされている（『日本の祭り』 pp. 16-20）。

また、菅原道真公を祀る北野天満宮でも、七夕は「御手洗祭」と呼ばれて、太陰暦の7月7日に開催されている。

京都市観光協会によると、京都では、冷泉家のように、太陰暦で、七夕を楽しんでいる普通の家も多いということだった。

太陽暦の盂蘭盆も季節とのズレを持つ行事の一つである。太陰暦の7月15日は、大体、太陽暦の8月下旬か9月の初め頃にあたり、季節は初秋。盆の季語も秋なのでぴったりと合っていた。しかも、太陰暦の15日は満月である。

ところが、太陽暦の7月15日は、梅雨明け前後で、今までの涼しくなり始めたころの盆行事とは異なり、梅雨真っ只中の墓参りとなる。

日本でも、イギリスの「ジューン・ブライド」に憧れて、6月に結婚式を挙げたがる花嫁が多いと聞かすが、梅雨の結婚式も乙なものと思っているのだろうか。イギリスで6月に結婚式が多いのは、この6月の月がcaろうじて雨も少なく、比較的天気が安定している唯一の月というだけのことである。何も考えずに、西洋の真似をしても、しとしと降り続く梅雨空の下での結婚式をひたすら願う花嫁は別として、出席者にはひどく迷惑な話である。

キリスト教の大きな行事の「イースター」だって、太陰暦のままである。春分が終わった後の満月を待ち、その直後の日曜日が「イースターサンデー」と決められている。新学期がイースターの後に始まり、毎年、不定期の開始となるが、「月」が主役の大事な行事は、しっかり守り続けられている。

明治になって、太陽暦の7月に移された盆行事は、あまり好評ではなかった。特に長崎では、お盆には、墓所にご馳走を持ち込み、墓の前で宴会を催し、墓参りに来られた親戚、知人を接待するのが慣習となっている。梅雨の時期の飲み食いであるため、当然、衛生上問題が生じないわけがなく、この食事が誘引した伝染病（コレラ）がたびたび大流行している。

太陽暦移行後、本当に長い間、盆の開催時期がなかなか決まらず、昭和27年にやっと、太陽暦での月遅れの盆が、8月13日から3日間の開催となった。梅雨の心配は無くなったが、お月さまのことは考慮されていないので、たまたま満月になる以外、暗い墓所での盆となることが多い。江戸時代の長崎の盆風景は、山一面の提灯と満月の絵（『川原慶賀の「日本」画帳—シーボルトの絵師が描く歳時記』p.97）が多いし、長崎の盆に相応しく、明るく楽しい盆祭りの雰囲気が伺える。

### 長崎盂蘭盆準備の調査

2017年夏、長崎。駅前から路面電車を乗り継いで、「おすわさん」（諏訪神社）の下を通過。電車通りには、目当てのものはなかなか見つからない。とうとう終点の螢茶屋まで来てしまった。今日は、8月10日。盆の月も半ばに差し掛かる。

ふと、何度か行った京都の盆準備が頭をよぎる。京都、鴨川に架かる旧五条橋（現在の「松原橋」）の東側は、昔「鳥辺野」と言われ、庶民の葬場であった。六道の辻にある珍皇寺で、大勢の人が「六道はん」（または「六道さん」）へお詣りして、「迎え鐘」を撞かせてもらい、高野槇や蓮の葉を買い、「おしょうらいさん」（ご先祖さま）をお迎えする準備がすっかりできている頃である。8日から10日の3日間は、珍皇寺のすぐ近くの六波羅密寺では、一千年以上も続く「萬燈会点灯法要」がおこなわれているはずである。

ここ長崎では盂蘭盆（長崎では単に「盆」と呼ばれる）の準備はどうなっているのだろうか。

電車の終点、螢茶屋に到着。この場所は、なかにし礼氏の小説『長崎ぶらぶら節』にも登場する。

判人の松助が、「螢さ。ここは螢茶屋という螢の名所たい」（p.22）と、10歳のサダに教えてあげる。松助は、サダを茂木の近くの網場という漁村から、長崎の丸山の置所に届ける

途中で、「西の箱根」と言われる日見峠を越えて、夕方になってやっと「蛭茶屋」と呼ばれるこのあたりに差し掛かった場面である。

ここは、あの有名な眼鏡橋が架かっている中島川の上流にあたる所。少し上ったところに一ノ瀬橋があり、ここを渡ると、シーボルトが住んでいた鳴滝の方になる。「鳴滝ならあるかも」と思いながらも、結局、その日は、橋を渡らず、街へ帰ることにした。

今度は電車通りの反対側の通りを中島川沿いに下りながら探すことにする。しばらく、下りていくと、伊良林のあたりに差し掛かる。「ここなら」と期待しながら、探す。伊良林小学校が見えてきた。やっと見つけた。

川沿いに、作りかけの船。そう「精霊船」。飾りつけこそまだなされていないが、屋形船の形も、船の舳先に取り付ける「みよし」と呼ばれるものもほぼ出来上がっている。5メートル以上の大きな船だ。個人の船ではなく、町内で作って、町内のご先祖さまたちを乗せる「催合船（もやいぶね）」。

やっと長崎に帰った実感がする。

次の船を探しに、川沿いをさらに下る。今度は、左手に取り掛かったばかりの船。「みよし」を作る孟宗竹が一本、傍に置かれてあった。船は、枠だけでできていた。おそらく、個人の船だろう、さほど大きくはない。もしかしたら「女船」かも知れない。女性の船は遠慮して小さなものにするという心遣いがある、と聞いたことがある。

さらに進むと、結構大きな船。こちらは、ほぼ出来上がっていて、当日の飾りつけを待つだけの状態。屋形の部分も傷まないようにブルーのシートがかけられていた。恐らくこれも、個人の船ではなく町内で出す「催合船」と思われる。

そこから町の繁華街まで歩いてくる途中、眼鏡橋付近で、二艘の船を発見。提灯の中に入れる電球も取り付けられていた。やはり、準備は着々と進んでいる。

長崎では13日に迎え火を焚いて、あるいは、玄関先か家の裏手に家紋入りの提灯を掲げて、ご先祖さまをお迎えする。特に初盆の家は、何かと大変である。今年の7月初めから今年の6月の終わりごろまでに亡くなった人が、初めてわが家に帰ってくるのを迎えるのである。

### ご先祖さまの到着は「丑三つ時」

11日か12日までに、墓所に出かけて、墓の掃除を済ませ、10個以上の提灯を吊るす燈籠掛けを設ける。

13日は、自宅で精霊棚（出仏壇とか盆棚ともいう）を作り、萱か藁で編んだ菰を敷き、供え物をする。ご馳走や飲み物を持参し、一家親族で墓所に参詣する。墓碑に食事を差し上げ、次に燈籠を灯し、子どもたちは、箭火矢（やびや）や音火矢（おとびや）などの小型花火を打ち上げて楽しむ。そして大人たちは、墓参りに訪れた親戚、知人を墓前で饗応接待して夜をすごす。そのような風習が昔から続いている。

この日の夜中、午前2時ごろにご先祖さまがわが家に到着すると信じられている。昔でいうと丑の刻。丑の刻は午前1時から3時までの2時間ぐらい。それを四つに分割して、三つ

目が午前2時ごろ。そう、まさに「草木も眠る丑三つ時」である。陰陽の世界では、結界が開き、幽霊や妖怪や鬼や悪霊が出て来て活動する時間である。あの白装束に蠟燭の「丑の刻参り」もこの時間になされる。ご先祖さまもこの時間に、わが家を目指すのである。迎え火には、ご先祖さまの目印となる役目と、一緒についてきた悪霊たちを追い返す効き目があると聞く。

そして、ご先祖さまが到着される前に、精霊棚に米の粉で作った「迎え団子」を供えておく。団子の真ん中を摘まみ上げて高くするから、鼻の形に似てくる。だから「鼻だんご」とも呼ばれている（『楽 長崎四季ごよみ』）。

ご先祖さまのお帰りを心待ちにしている家では、午前2時ごろまで、起きて待っているという。

14日と15日は、自宅の精霊棚にお供え物を。墓所にも参詣。燈籠も灯す。

15日は、墓所参詣を早めに済ませて、長崎お盆のクライマックス、精霊流しの準備にかかる。今度は、送り団子を用意する。そして、「ところてん」や「葛」で、皿の形にこしらえた「鏡心太」を精霊棚にお供えする。この鏡でご先祖さまにあの世への旅支度をしてもらうためである。こうして、いよいよ精霊流しが始まるのである。

### 長崎精霊流し

ここ長崎で、精霊流しが始まった江戸時代には、竹、麦藁、萱などの菰を用いて、舟のようなものを作り、帆柱を立て、燈籠を掲げ、供え物を乗せ、これを担いで港に運び、流すという簡単なものであった。恐らく、形は違うが、日本各地で見られる「灯籠ながし」のようなものだったのかもしれない。

昨夜流した 灯籠は、  
ゆれて流れて どこへ行った。

西へ、西へと かぎりなく、  
海とお空の さかいまで。

ああ、きょうの  
西のおそらの あかいこと。

金子みすゞ 「灯籠ながし」（『金子みすゞ詩集』）

長崎は、北も東も南も山に囲まれているので、長崎湾は西を向いている。流した船は、この詩のように、夕日の沈む、西へ、西へと流れて、湾を出て、大海原に出る。当然、その方角は赤い夕焼け。「落日の彼方に浄土あり」と言われるように、長崎の人たちも、この湾の

「西方十萬億土」の彼方に、憧れの浄土を見ていたのであろう。

江戸時代、この浄土に流れてゆくであろうこの粗末な舟を見ていた人がいた。幕府の天文方であり、儒者でもある人物。名前は蘆草拙。

このような舟ではご先祖さまにあまりにも申し訳ないとして、藁できちんとした小舟を作って流した。その舟を見た長崎の人たちが真似をして、立派な船を作り始め、流すようにした。

これが精霊船の始まりだとする説がある。

また、当時、長崎には多くの唐人たちがやって来ていた。彼らは、故郷を離れた長崎で亡くなった同胞たちを弔うために、「彩舟流し」を行っており、この舟を真似して精霊船を作ったという説もある。

そして、菩薩がすべての生き物を涅槃の彼岸に送るために使っていた船が「弘誓（ぐぜい）の船」と呼ばれているが、「長崎ぶらぶら節」の古賀十二郎翁がその弘誓の船から精霊船を思いついたという説もある。

今では、大小さまざまな船が県内で3000艘ぐらい、長崎市内だけでも1200～1500艘は、流されるという。

角川春樹句集の中に

盆三日 あまり短かし 帰る刻

という句がある。

ご先祖さまにも家族にも、本当に短い3日間。ご先祖さまは、13日の夜中を過ぎて、14日の午前2時ごろ、それぞれの家に到着するから、実際に一緒にいるのは、丸2日である。

盆の期間は、前に述べたように、最初は、7月15日の一日だけ。それが、「魂祭り」などと結びついて、13日から16日までの4日間になり、ご先祖さまも家族の一員として、今よりもう少しだけ長くこの世に滞在出来た。

その意味では、京都は、昔ながらの4日間のお盆の伝統をしっかりと守り続けている。お盆に入る前の8月7日から、六道珍皇寺で、おしよらいさんをお迎えする準備をして、お盆の間は、精一杯おもてなしをして、16日の夜、五山の送り火とともにおしよらいさんをお送りする。炎が消えていくとともに精進明けとなり、お盆の行事を終える。

長崎でも、以前の精霊流しは、15日の深夜を回った、正確には16日の午前2時ごろから始まって、流し終えるのが早朝だった。今は、3日目、15日の夜に、精霊流しが行われる。精霊船の周りで爆竹を鳴らすのは何のためか忘れられている。爆竹は、魔除けのためで、悪霊が精霊船の進行を妨げたり、船に乗り移らないようにするためのものである。この夏も、15日の夕方、5時ごろには、何艘もの精霊船が長崎駅前を通り過ぎ、爆竹の大音量と煙を出しながら流し場に向かっていった。この時間、悪霊たちが出てきているはずがないのに。やはり、ご先祖さまには、こちらに来られた、悪霊も出てくる丑三つ時に、お帰り願うのが最適だと

思われる。それでこそ、爆竹の騒音と猛煙の意味があるというものではなからうか。

ご先祖さまも久しぶりにわが家に帰り、家族と一緒にご馳走を食べ、丸二日間、久しぶりのわが家でくつろぎ、満足してあちらの世界へお戻りになられる。夕方には、供物を一杯積んだ船に乗り込み、流し場の大波止まで担いで運ばれる。

渋滞の中、(父の精霊船の前を正装して歩いている)幸太の船を小さな船がおいこしてゆく。

精巧につくられたその長さ一メートルにも満たない小さな精霊船は、五島行き的高速船をかたどっている。誠実につくったなあ。幸太は見入った。船の客席部分には、明かりが灯してあり、若い男性が一人でそっと肩に担いでいる。その後ろを若い女性が線香の束に火を点けて一緒にあるいてゆく。おそらくあの船で送られる御霊は、生まれてすぐか、あるいは生まれる前に亡くなった子供の御霊だろう。あれほど小さい船にするのは、長い人生を懸命に生きて死んだ人に対する慮りだ。だが、本当は、長短も軽重もない。生命は生命だ。担いでいるのはおそらくその子の父親と母親に違いない。

大きな船の間をそっと抜けてゆくその船のいじらしさに、幸太は気づいた。そしてその子を最も愛した人たちがたった二人で心をこめて送る、その船の重さにそっと両手を合わせた。

どれほど小さくても上下はない。

あの小さな船はきっと自分たちの船よりもずっと重い何かと一緒に流すのかもしれない、と幸太は合掌して見送った。

さだまさし 「精霊流し」(『精霊流し』)

このような文章は、おそらく長崎の人でないと書けない。表面は喧騒で派手な精霊流しの本当の意味が分かっている。大波止の流し場までは威勢が良かった担ぎ手たちも、「また来年、戻って来っとぞ」と船を流した(今では海に流すのは禁じられている)後は、突然、別れがやってくる。何とも言えない「つらさ」を抱きながらわが家へ帰ることを作者はわかっている。行きは「チャンコイ、チャンコイ」と賑やかだった鉦の音が、帰りは静かに「カーン、カーン」と別れを惜しむように、哀愁を帯びて、わびしく響いてくる。まるで、もう一度、ご先祖さまを失くしたような気にさせる。何かに似ていると思う。

## 二度目の葬式

昔、送葬の一つに「野辺送り」というのがあった。地方によって多少の違いはあるだろうが、一般的に、葬儀の後、死者の遺族が列をなし、死者が入った棺を担ぎ、埋葬地へ向かう。精霊流しはそれに似ていないだろうか。

両者を比較してみたいと思う。



野辺送りの先頭は、松明か高張提灯。精霊流しは、喪主がぶら提灯を持つ。

先頭の人物は、どちらも喪主。どちらも正装。

野辺送りは「棺」か「棺桶」。精霊流しは基本的には「屋形船」。数人で担がれると、祭りの神輿のようにも、見ようによっては、棺のようにも見える。

悪霊が取りつかないように、野辺送りは「松明」、精霊流しは「爆竹」。

野辺送りは吊いの鐘。精霊流しは、鉦。

野辺送りの棺は担がれ。精霊流しの精霊船も担ぐ。

野辺送りの行きは賑やか。「散華」や紙に包んだ小銭の入った籠を振り、小銭をばらまき、葬列についてきた子どもたちが取り合って採り合って拾う。

精霊流しの行きは、激しく叩かれる鉦と威勢の良い掛け声。それに爆竹の音。

野辺送りは、棺の前後に葬列をなす。精霊流しも船の前後に列をなす。

野辺送りは、埋葬し、往生を祈る。精霊流しは、船を流し、浄土へ届ける。

野辺送りは埋葬終了後、家族だけで引き返す。

精霊流しは家族と担ぎ手、掛け声はなく、泣くような鉦の音のみ。

両方とも何とも言えないわびしさだけが残る。

やはり、精霊流しは、野辺送りと同じ、葬式なのである。二度目の葬式。こちらが本葬かも知れない。ご先祖さまの魂を家族だけの手で、直接、浄土へ送ってやれるのだから。

家族の誰かを失くした時、ほとんどの場合が、突然の死の訪れで、最初の葬式は、驚きと悲しみの失意の中で、慌ただしく行われてしまう。亡くなった人が望んだ葬式を出せたか考える余裕などない。菩提寺の指示通り、あるいは、「死んでください。あとは万事お任せください」という葬儀社の進行手順に沿って、式が滞りなく執り行われただけである。

しかし、この精霊流しを「二度目の葬式」と考えれば、盆まで準備をする時間は十分ある。亡くなった人がどんな葬式を望んでいたか推測する時間もある。今回は、亡くなった人の希望を優先して、葬儀を執り行うことも出来る。最初の葬式では、決まった棺であったが、今度の棺、精霊船は亡くなった人の好きな形にして良い。どのような形でも受け入れてもらえる自由な気風がある。

2017年は、船員だった人の豪華客船、ディズニーが好きだった子供のミッキーの船、20メートル以上もある大きな船、昔ながらに本当に担がれた船（最近は引き船が多い）、ペットを失くした人たちが流した「龍踊（じゃおどり）」の龍の形をした船など、様々な形の精霊船が目を通り過ぎて行った。

そして、家族だけでなく、親戚だけでなく、友だちだけでなく、町の知らない人たちから見送ってもらえる。それだけではない、1500艘もの他の船と一緒に、何万人もの観光客も見送ってくれるのである。ありがたいことではないか。

そして、流した後（実際は、解体されてしまうのだが）は、先ほどまでの賑やかさが嘘の

ような通りを悲しく響く鉦の音とともにわが家へ帰る。1500もの鐘の音が、夜中過ぎまで響き、家々の枕元までわびしさが届いてくる。死者とは、直接関係ない家の人たちも、その鉦の音に、どこのご先祖さまも浄土に無事到着できるように、そっと手を合わせてくれる。それが長崎人である。

長崎人の中には、うっかり者も多い。だから、15日の夜、精霊船に、不注意にも乗り遅れたご先祖さま、また、ついつい長居をしてしまったご先祖さま、さらには、こちらの方が居心地が良く、帰るのを渋っているご先祖さま、きつといるはずである。でもここは長崎、心配ご無用。うっかり者のご先祖さまのために、「流れ灌頂」というのがちゃんと用意されている。ここでもお地蔵さんが一肌脱いでくれる。

16日の午前中、子どもたちと世話役の大人たちが地蔵堂に集まってくる。ここで、子どもたちの手助けをしてくれるのは、お地蔵さん。子供たちは、「無延命地蔵正尊」と書かれた短冊を結んだ笹竹を持つ。地蔵堂から木製の小さなお地蔵さんをお借りして、小型の精霊船を担ぎ、町中を回る。まだこちらに留まって、帰れなくなったご先祖さまたちを鉦を鳴らしながら、お地蔵さんの力を借りて集めて回る。さすがにここでは、「ドーイドーイ」の掛け声はない。そして、集められたご先祖さまたちを近くの川に流して、送り出してやるのである。立山地区には、まだこの「流れ灌頂」という盆行事の一つが残されている。(『長崎精霊流し』pp.115-117)

「(八月) 一日に迎え燈籠をやりました。軒先に灯籠を立てて、仏様が何時お帰りになっても、『どうぞ、こちらですよ』と道標になるように(『長崎今昔物語』p.57)」というのも、もしかしたら、うっかり早く来すぎてしまったご先祖さまへの配慮かも知れない。

うっかり屋のご先祖さまにもやさしい町である。

### 長崎、わが家の神仏習合

このように、ご先祖さまを大事にしている長崎人であるが、盆以外の普段の生活で、神さまや仏さまをどのようにお祀りしているのでしょうか。

お願い事をするときに、「神さま、仏さま」と思わず口から出てしまうのは、私だけだろうか。この時の「神さま」、そして「仏さま」とは、何をイメージしているのでしょうか。

「あまり、お願いごとに仏さまは登場しないけれど。『神頼み』という言葉はあっても、『仏頼み』という言葉はないですね(『仏教ではこう考える』p.50)」。

確かに、合格祈願などは神社に行って、神さまにお願いすることが多いような気がする。仏さまは、ご先祖さまのため(葬式仏教)という意識が強い。どうせなら、両方、お参りした方が、願いが叶う確率は高いはずだ。

個人の家で、神さまと仏さまを一緒に祀ることはあったのだろうか。

さて、わが家だが、家は曹洞宗。仏壇があり、別の部屋に神棚、同じ部屋の隅に、荒神棚もあった。母の実家の本家には、庭にお稲荷さんの祠もあった。

仏壇の正面、最上段の中央には、お釈迦さまが本尊として祀られ（正式には、三尊仏として「一仏両祖のお絵像」が祀られるのであろうが、両祖、高祖道元禪師と太祖瑩山禪師の絵がかけられていたかどうか定かではない）、ひとつ低い段に位牌。恐らく、小さいときに亡くなった姉の位牌だったのだろう。

毎朝、仏壇には、炊き立てのご飯を仏飯器によそい、水（鬺伽）かお茶を茶湯器に入れて、櫛と生花をかえ、ローソクを灯し、線香に火をつけ、鈴（りん）を鳴らし、正座し、合掌し、礼拝し、お経をあげる。ただ、お経の前に、何かをぶつぶつと唱えていた。それは、「南無阿弥陀仏」という念仏でもなく、「南無妙法蓮華経」というお題目でもなく、「南無大師遍照金剛」という御宝号でもなかった。その当時は、全く分からなかったが、禪宗の「南無三世諸仏」か「南無釈迦牟尼仏」だったのかも知れない。

それを何度か繰り返した後、読経。どんなお経だったのかははっきり覚えていないが、あまり長くはなかったので恐らく「般若心経」だったのかも知れない。幼くして亡くした娘のこともあったのだろうか、両親は、毎朝、このお勤めだけは欠かさなかった。

仏さまのお勤めが済むと、今度は神棚のある部屋に移動。神棚には、水をあげて、櫛を替える。その傍には、「幣」も捧げてあったような気がする。神棚はかなり高いところにあつたので、こちらは父の仕事。朝は、蠟燭を灯し、合掌して、礼拝し、神さまへの朝のお勤めは終わる。

その代り、夜に、神棚の前で、家族で祝詞をあげる。両親の脇に無理やり正座させられていたせいだろうか、仏さまのお経と違って、こちらはしっかり覚えている。もちろん、意味も分からず、両親の口真似だから、正確にはいれないが、今でも部分的だが諳んずることはできる。

「たかまがはらに かむづまります かむろぎ かむろみのみこともちて……」と父母の声が今でも耳に残る。「……つくしのひむかのたちばなの……」とか「はらへたまひ きよめたまふと……」,そして最後の「……きこしめせと かしこみ かしこみまます」で終わる。

「荒神」さんは、家内安全の屋敷神として祀られていたのではないかと思うが、蠟燭を灯し、手を合わせるぐらいで、お経や祝詞みたいなものを、これとって唱えたりしているところを見たことはなかった。

そういえば、夏に、「祇園さん」（「祇園の神」）にも、参っていた記憶がある。祇園信仰は、本来は、陰陽道の神、牛頭天王と神道の神、スサノオを祀る、いわゆる神仏習合であったが、明治の神仏分離の影響で、スサノオを祭神とする神道の信仰となっている。京都の祇園社は八坂神社と社名を改称した。ここ長崎でも、清水寺のすぐ隣に、祇園さんの八坂神社が仲良く並んで立っている。

このような神さまや仏さまを祀っていたので、最初は、自分の家の宗教が、仏教なのか、神道なのか、はたまた、別の宗教なのかまったくわからなかった。何と節操のない家だと思っ

たこともあった。

しかし、長崎では、このように神さまも、仏さまも、荒神さまも祀っている家が多いと聞く。友だちの家もそうだった。長崎の人びとの宗教観とは、このような感じなのであろう。

2016年の盆に、キリスト教徒の精霊船が流されたことが報道された。「仏教の行事にキリスト教徒の精霊船って?」と思った人もいると思う。精霊船を流して送る先が、西国浄土じゃなくて、天国とはいかがなものかと。

しかし、キリスト教の信者でも長崎人なら、亡くなったら、盆ぐらいは、家に帰りたと思うはずだ。家族に、墓参りもしてもらえないなんて寂しい限りだ。隣の墓では宴会が開かれているというのに。そして、キリスト教徒でも、15日の夜は、長崎人として、船で流してほしいと願うはずだ。これが「二度目の葬式」なら、亡くなった人の本音に沿って行えるはずであるから。

長崎人は、本当は、「神さま、仏さま、デウスさま」と言って、お願いしたいところである。しかし、信者でもない者が、「デウスさま」と馴れ馴れしく呼べない何かがある。長崎人は、昔から、キリスト教の信者さんに対して、見て見ぬふりをしてきて、何かすまないというか、申し訳ないというか、そのような気持ちを抱いてきた人は多いのではないだろうか。

長崎在住のフリーライター、下妻みどり氏が「じつはいままでキリシタンのことはちょっと避けて通ってきたというのが本音です。やっぱりまだまだ微妙な地元の感情が息づいているのを感じますし、キリスト教徒でない人間にとっては、キリスト教に対する後ろめたいような複雑な気持ちが何となくあります(『聖地巡礼——長崎、隠れキリシタンの里へ』p. 211)」と書いている文章に出遭った。長崎人の中に、同じように感じている人と出遭った気がしている。

### 江戸時代、西洋人にとっての日本は長崎?

「鐘が鳴る。黄昏時の長崎の空に、螢火のように音が飛び交う。あれは寺の鐘、あれは教会の鐘」

と『長崎ぶらぶら節』(p. 34)にあるように、長崎には鐘の音がよく似合う。この小説はさらに鐘の描写が続く。

「西の海に港を構え、北東南の三方の山にそって家並みが広がっているこの劇場のような作りの町は鐘の音が良く響く。長い余韻を曳いて流れる寺の鐘、その間を縫うようにして軽やかに鳴り渡る教会の鐘。」

確かに、風頭山のふもとにある14ものお寺が集まった寺町筋から、お寺の鐘の重い音が「ゴ——ン」と煩惱を払ってくれるかのように響き渡る長崎。その音が消え去らないうち

に、天使がベルをもって空から舞い降りたかのような澄んだ音色の教会の鐘が「カランカラン」、「カランカラン」と響き渡る。浦上の方に行けば、「アンジェラスの鐘」、駅前に行けば、二十六聖人殉教地、西坂の丘のすぐ下にある「中町教会の鐘」。オランダ坂あたりからは、「大浦天主堂の鐘」。寺の鐘の音を教会の鐘の音が追いかけて、やがて交じり合っ一つになる。

1560年、平戸を皮切りに、横瀬浦、福田と転々としてきたポルトガルとの貿易港も、キリシタン大名大村純忠の領地の寒村、長崎に落ち着いた。

こうして、1571年より新しく開かれた長崎の町は、キリスト教信者によって形成された町（『長崎初期キリシタンの一考察』）であった。各地から、貿易商人とともにキリシタンが移住し、1580年には、長崎と茂木が、1584年には浦上がイエズス会領として寄進され、15以上の教会が次々と建てられた。サンタ・マリア教会にはイエズス会の日本本部が置かれ、長崎の町は、教会の鐘が鳴り響き「小ローマ」と呼ばれていた。

しかし、これらの教会は、1614年の禁教令以降、次々と破壊され、その跡地には、役所や寺院などが建設された。特に、1624年から1643年の間には、長崎の町に社寺が次々とつくられた。教会の鐘に代わって、寺の鐘が長崎の町に鳴り響くことになった。

明治になって、禁教令が解かれた後、再び、教会の鐘の音が長崎に戻って来た。もともと教会の鐘が鳴り響いていた町に、歴史的に見れば、後からやってきた寺の鐘が鳴り渡り、今では、両方とも機嫌よく調和している。なかにし礼氏は言い当てている。「薄紫の空を背景にして、こんな不思議な音楽の聞ける町は世界広しといえどもたぶん長崎だけだろう。」

そして、さらに、盆の15日は格別である。一年のうちで、この日だけ、教会の鐘、寺の鐘、それらの鐘に精霊流しの鉦が加わるのは。

そんな長崎だから、せめて、精霊流しの時は、仏教も神道もキリスト教もない。みんな家族を亡くした人ばかりだから。今回の二度目の葬式は宗教の行事としてではなく、長崎の行事として送り出せばよい。古式に則り、紋付き羽織はかま姿でぶら提灯で送るのもよし、豪華な精霊船でなくてもよい。送る人の気持ちか、送られるご先祖さまに伝わればよい。

2016年の盆の話題をさらったのは、さだまさし氏のお母さんの精霊船。お父さんの精霊船より、気持ちだけ小さめの女船だそう。それこそ、古式に則った立派な精霊船。

そしてもう一つは、先ほども少し触れたが、キリスト教徒の精霊船。真っ白な教会をそのまま船にした大きな精霊船。教会型精霊船の壁にはステンドグラスが何枚もはめ込まれた3連結（15メートルぐらいの大きさ）。皆、その素晴らしさにびっくりはしただろうが、「帰れ」なんていう人はいなかったはずだ。むしろ、「すごかねー!」、「良かねー!」、「立派かー!」とか称賛の声ばかりだったと聞く。「以前もキリスト教の方の中にも船を出されたことがあり、その船の帆には聖像が描かれていた（『長崎精霊船よもやま噺』p.30）」とある。その時も非難があったとは書かれていない。

おそらく、亡くなったときは、キリスト教徒としての葬儀を終えられたはずである。今夜

は、故人を長崎人として、自分たちの手で天国に送ろうという家族の気持ちが痛いほど伝わってくる。長崎人なら、この家族の気持ちを十分理解できるはずである。素晴らしい二度目の葬式である。

コレラや腸チフスが流行して11月まで延期になっても中止にはしなかった。長崎奉行所から墓所での飲食を控えるよう訓諭されても、墓での宴会だけは慎んだ。明治天皇が崩御された御大葬の時も、肅として厳かに行った。戦時中、時局を鑑み、爆竹や提灯の数は自粛したけれども、ご先祖さまのために続けてきた。それが長崎の盆だから。それが長崎の精霊流しだから。

「見ろ、あれが長崎だ」

判人は西の空を指さし明るい声で言った。

<中略>

山裾の茶屋を過ぎたあたりで、何か変な匂いがした。

甘酸っぱいような油っこいような、鼻の奥に妙にへばりつく、胸がむかむかする匂いだった。

「これが長崎の匂いさ」

サダの心を読んだかのように判人が言った。

「気持ん悪か」

「異国から来た船の匂い、異人さんの匂い、石炭と石油の匂い、葉巻の匂い、カステラの匂い、卓袱料理と皿うどんの匂い、鼈甲の匂い、ギヤマンの匂い、花街の匂い、伴天連の匂い、西洋の匂い、文明の匂い」

「異国だ」

サダの足はすくんだ。

『長崎ぶらぶら節』(pp. 20-21)

江戸時代、幕府の鎖国政策により、長崎、出島は

日本にとっては、「西洋がやってくる場所」

西洋にとっては、「日本を知る基地」

(『川原慶賀の「日本」画帳—シーボルトの絵師が描く歳時記』p. 6)

だったのである。

ただ、遠山淳氏が「長崎の出島も外国からの入り口であり、日本人の『出口』ではなかった(「五島・長崎をめぐる異文化交流のトポグラフィー」)」と指摘しているように、長崎といえども、江戸時代は、日本人が、ここから自由に出ていくことはまだできなかった。日本

人だけでなく、出島に滞在していたオランダ人たちも、出国の際は厳しい検査があり、簡単に出国することは許されていなかった。それをはっきり示すのが、1828年のシーボルト事件である。帰国準備をしていたシーボルトに、「禁制品」の搜索が実施された。「葵の紋のついた帷子」や間宮林蔵が実測した「樺太地図」などが没収され、シーボルト自身は翌年国外追放になっている（『ケンペルとシーボルト』pp.64-68）。しかし、日本側の没収対象が「禁制品」に限られていた（『同書』p.68）ために、それ以外のもの（情報なども含めて）は、あるものは自由に、あるものは密かに持ち出されていたのである。事実、シーボルトは、出島滞在中に、収集品の多くを毎年の船で送っていたのである（『同書』p.68）。日本の情報はすでに西洋側に渡っていたのである。

このことから、「長崎、出島は、西洋にとっては、『日本を知る基地』」の役割を十分果たしていたのである。特に、はるばる遠くからやって来て、長崎出島から自由に入出りができない西洋人にとって、四年に一度の「江戸参府」を除けば、長崎出島が、彼らには日本そのものだったに違いない。

出島出入りの町絵師、川原慶賀は、オランダ商館長ブロンホフ、商館員フィッセル、商館医シーボルトらの注文に応じて、多くの絵を描いている（『同書』p.7）が、ほとんどが長崎の日常生活などを写實的に描いたものだった。そして、これらの絵が西洋に出ていき、日本が西洋に知られるようになった。しかし、知られたのは、本当は、日本ではなく、極端に言えば、長崎だったのである。この時代、西洋人が想像した日本は、日本だと思いこんだ長崎、一時期『小ローマ』と呼ばれた長崎であった」と言う身最負すぎるだろうか。

## エピローグ

ここでは、長崎と比較するために、随所で、重要な街や地域（京都と熊野）を取り上げてきた。両方とも長崎と通ずるものがあると思われたからである。

長崎と同じように、七夕や盆の行事を大事にしている京都。古くからの伝統や文化をしっかりと受け継いで、公の行事として、あるいは個人で密かに、それらを守り続けている京都。まさに「雅の国」である。

長崎と同じように「浄土」に向けて、船を流した熊野。日本の神々と海外からの仏を見事に混淆させてきたし、明治初期まで、「女人禁制」を貫いてきた高野山や比叡山と違って、どんな人たちも受け入れてきた熊野。計り知れない力を秘めた「異界」である。

そして、ここ長崎は、景色も、雰囲気も、そして匂いも、日本の他の地域とは全く違う、まさに「異国」。下妻みどり氏の言葉を借りれば、「あの世も入った異国」に違いない。

長崎を異国と考えれば、益ぐらい、「宗教色のない行事」として行っても良いのではないか。墓所には、仏教徒の墓も、キリシタンの墓も仲良く並んで立っている。中国の影響を受けた土神さまも一緒に祀られている。精霊船の出帆前に、近くのお寺の住職の読経はあるが、宗教性はそれほど感じさせない。どうしても宗教行事とみなしたければ、この日だけ、長崎

人は皆「長崎宗」の信者であるとみなしたらどうだろうか。そうすれば、精霊船を出すのに抵抗があった人たちも喜んで出せるのではないか。ご先祖さまは自分の精霊船を出してほしいと望んでいるにちがいないから。

『沈黙』の遠藤周作氏も、ここ長崎で、「良かばい、転んでも。また立ち上がれば良か」とささやく「やさしい神」と出会ったのかも知れない。ここなら許される。「遠藤周作記念館」がある外海（そとめ）地区には、キリシタンの神社（サン・ジワン枯松神社）だってあるのだから。

亡くなっても、生きている人として迎えて、真心を込めて歓待してくれる長崎。「死んでも大丈夫さね。盆にはちゃんと迎えて、精霊船で送り出してやっけん。心配なかと。安心して死んで良か。お通夜も、精一杯賑やかにやるたい。ちゃんぼんでん、皿うどんんでん、ちょっと高いけど卓袱料理でん腹いっぱい食べて、向こうにいけば良か。ばってん、精霊流しの費用だけは残してい（逝）ってほしか!」。これが長崎人の死にゆくものへの送ることば。

あまり、意識したことはなかったが、こんな長崎が今では心地よく感じられてきた。この「いい加減な大らかさ」が「いいあんばい」に思えてきた。

最後に、寺山修司氏の言葉で締め括ろう。

「もしかしたら、私は憎むほど故郷を愛していたのかも知れない。」

『田園に死す』の跋（あとがき）より

## 参 考 文 献

### 1. 長崎関係

- 『歌で巡る長崎』 宮川密義 2006年 長崎新聞社  
 『お盆 - 精霊船』（『長崎文化 51号』） 宮川正一 1993年 機関誌発行委員会  
 『九州地方の祭り・行事 - 佐賀・長崎』 佐賀県立博物館、長崎教育委員会（編） 2009年 海名書院  
 『解夏』（『解夏』） さだまさし 2004年 幻冬舎  
 『ケンペルとシーボルト - 「鎖国」日本を語った異国人たち』 松井洋子 2014年 山川出版社  
 『ケンペルのみた日本』 ヨーゼフ・クライナー（編） 1996年 日本放送出版協会  
 『五島・長崎をめぐる異文化交流のトポグラフィー』（『総合研究所紀要』 Vol. 37 No. 1） 遠山淳 2011年 桃山学院大学総合研究所  
 『ザビエルと歩く長崎巡礼』 長崎巡礼センター（編） 2008年 長崎文献社  
 『精霊流し』（『精霊流し』） さだまさし 2006年 幻冬舎  
 『資料で読む長崎県の歴史』 外山幹夫 1993年 清文堂出版  
 『図説日本のおどり』 中山義夫 2012年 日本図書センター  
 『聖地巡礼 長崎、隠れキリシタンの里へ』 内田樹、釈徹宗 2016年 東京書籍  
 『「旅」の話 - 浦上四番崩れ-』 カトリック浦上教会 2005年  
 『天領長崎秘録』 簗先好紀 2004年 長崎文献社  
 『トピックスで読む長崎の歴史』 江越弘人 2007年 弦書房  
 『長崎』 原田伴彦 1980年 中央公論社  
 『長崎おいしい歳時記』 下妻みどり 2012年 書肆侃侃房



- 『長崎県謎解き散歩』 原田博二, 福田八郎, 小松勝助 2012年 新人物往来社  
 『長崎県の歴史』 瀬野精一郎 他 2005年 山川出版社  
 『長崎県の歴史散歩』 長崎編高等学校教育研究会地歴公民部会歴史分科会(編) 2005年 山川出版社  
 『長崎県文化百選 祭り・行事編』 長崎県(編) 1999年 長崎新聞社開発事業部  
 『長崎今昔物語』 松田晴一 1997年 よか研究所  
 『長崎歳時記十二月』 深淵久 1978年 西日本新聞社  
 『長崎雑学紀行』 後藤恵之輔 2006年 長崎文献社  
 『長崎四季』 橋本白杜 1987年 耕文舎  
 『長崎市史 一風俗編 下』 長崎市(編) 1981年 清文堂出版  
 『長崎事典 風俗文化編』 1982年 長崎文献社  
 『長崎事典 歴史編』 1988年 長崎文献社  
 『長崎精霊流し』 土肥原弘久, 入江清佳 2017年 ゆるり書房  
 『長崎精霊船よもやま噺』(『長崎文化 55号』 越中勇 1997年 長崎国際文化協会  
 『長崎初期キリシタンの一考察』 越中哲也 2009年 長崎純心大学博物館  
 『長崎「地理・地名・地図」の謎』 村崎春樹 2014年 実用之日本社  
 『長崎南蛮文化のまちを歩こう』 原田博二 2012年 岩波書店  
 『長崎に眠る西洋人』 木下孝 2009年 長崎文献社  
 『長崎百話』 越中哲也 1999年 長崎純心大学博物館  
 『長崎ぶらぶら節』 なかにし礼 1999年 文藝春秋  
 『長崎への招待』 嘉村国男(編) 1975年 長崎文献社  
 『長崎迷宮旅暦』 下妻みどり 2008年 書肆侃侃房  
 『長崎のお盆』(『長崎町人誌 第1巻』) 越中哲也 1994年 長崎文献社  
 『長崎のお盆』(『長崎文化 第51号』) 橋本正子 1993年 機関誌発行委員会  
 『長崎ひとりあるき』 越中哲也 1978年 長崎文献社  
 『長崎歴史の旅』 外山幹夫 1990年 朝日新聞社  
 『長崎を識らずして江戸を語るなかれ』 松尾龍之介 平凡社  
 『盆まねき』 富安陽子 2011年 偕成社  
 『楽 一長崎四季ごよみ』 2015年 イーズワークス  
 『わが町の歴史長崎』 外山幹夫 1984年 文一総合出版  
 『わかる!和華蘭』 長崎市史編さん委員会 2017年 長崎新聞社  
 『わたしの長崎地図』 佐多稲子 2012年 講談社

## 2. 熊野, 補陀落関係

- 『『吾妻鏡』 所載・智定坊の補陀落渡海』(『印度學佛教學研究第四十三卷第二号』) 根井浄 1995年 日本インド学仏教学会  
 『街道をゆく 一熊野・古座街道, 種子島みちほか』 司馬遼太郎 2005年 朝日新聞社  
 『観音浄土に船出した人々』 根井浄 2008年 吉川弘文館  
 『帰還』(『六福人』) 諸星大二郎 1999年 ホーム社  
 『熊野古道巡礼の旅 一よみがえりの聖地へ』 高森玲子 2017年 説話社  
 『死の国・熊野 一日本人の聖地信仰』 豊島修 1992年 講談社  
 『聖地巡礼 ライジング 一熊野紀行』 内田樹, 釈徹宗 2015年 東京書籍  
 『綱切島』 吉良幸生 1997年 日本図書刊行社  
 『渡海』(『熊野物語』) 中上紀 2009年 平凡社  
 『日本逃亡幻譚 一補陀落世界への旅』 松田修 1978年 朝日新聞社

- 『補陀落』 川村湊 2003年 作品社  
 『補陀落』（『中上健次全集 1』） 中上健次 1995年 集英社  
 『補陀落幻影』 東野光生 2004年 作品社  
 『補陀落山へ』 大路和子 1999年 新人物往来社  
 『補陀落渡海記』（『日本の文学 71』） 井上靖 1964年 中央公論社  
 『補陀落の径 - 角川春樹句集』 角川春樹 1984年 深夜叢書社  
 『ふだらく走り』（『南方熊楠全集 第5巻』） 南方熊楠 1988年 平凡社  
 『フダラク渡りの人々』（『火山列島の思想』） 益田勝実 1974年 筑摩書房

### 3. 「死生観」に関連するもの

- 『青い鳥』 メーテルリンク（江國香織 訳） 2013年 講談社  
 『青い鳥』 メーテルリンク（末松氷海子 訳） 2004年 岩波書店  
 『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』 井村和清 1980年 祥伝社  
 『いのち - 宗教家6人との対話』 森清範 他 2013年 講談社  
 『うらやましい死にかた』 五木寛之（編） 2000年 文藝春秋  
 『うらやましい死に方』 五木寛之（編） 2014年 文藝春秋  
 『おだやかな死』 シモーン・ド・ボーヴォワール（杉捷夫 訳） 1995年 紀伊国屋書店  
 『死者はどこへいくのか』 大城道則（編） 2017年 河出書房新社  
 『死者を弔うということ』 サラ・マレー（榎野みさと 訳） 2014年 草思社  
 『死で終わらない物語について書こうと思う』 釈徹宗 2015年 文藝春秋  
 『死ぬことを学ぶ』 福田和也 2012年 新潮社  
 『「死ぬ瞬間」と臨死体験』 E・キューブラー・ロス（鈴木晶 訳） 1997年 読売新聞社  
 『死の壁』 養老孟司 2004年 新潮社  
 『死を見つめる心』 岸本英夫 1973年 講談社文庫  
 『死をめぐる50章』 週刊朝日（編） 1998年 朝日新聞社  
 『葬儀と日本人』 菊池章太 2011年 筑摩書房  
 『それからの納棺夫日記』 青木新門 2014年 法蔵館  
 『生と死をめぐる旅へ』 吉田敏浩 2003年 現代書館  
 『世界のお墓』 ネイチャー&サイエンス 2016年 幻冬舎  
 『ためいきのとき』 アンヌ・フィリップ（角田房子） 1996年 筑摩書房  
 『特別授業“死”について話そう』 和合亮一 2013年 河出書房新社  
 『70歳！人と社会の老いの作法』 五木寛之、釈徹宗 2016年 文藝春秋  
 『日本人の死生観と葬儀』 鳥田裕已 2016年 海竜社  
 『日本人の死生観を読む』 島蘭進 2012年 朝日新聞出版  
 『日本人の死はどこへいったのか』 鳥田裕已 2008年 朝日新聞出版社  
 『日本その心とかたち - 現世から浄土へ』 加藤周一 1987年 平凡社  
 『日本その心とかたち - 神々と仏の出会い』 加藤周一 1987年 平凡社  
 『納棺夫日記』 青木新門 2009年 渋谷文泉閣  
 『母、美しい老いと死』 アンヌ・フィリップ（吉田花子 訳） 1998年 晶文社  
 『人は死んだらどこへ行くのか』 鳥田裕已 2017年 青春出版社  
 『蕨野行』 村田喜代子 1994年 文藝春秋

### 4. 宗教（神社、お寺など）関係

- 『あなたの知らない空海と真言宗』 山折哲雄 2013年 洋泉社

- 『あなたの知らない親鸞と浄土真宗』 山折哲雄 2013年 洋泉社  
『あなたの知らない道元と曹洞宗』 山折哲雄 2013年 洋泉社  
『いきなりはじめる仏教入門』 内田樹, 釈徹宗 2012年 角川学芸出版  
『うちのお寺は曹洞宗』 藤井正雄 (監修) 2006年 双葉社  
『大阪の神さん仏さん』 釈徹宗 2012年 140B (イチヨンマルビー)  
『往生要集』 中村元 1983年 岩波書店  
『往生要集 (上)』 源信 (石田瑞磨 翻訳) 2003年 岩波書店  
『往生要集 (下)』 源信 (石田瑞磨 翻訳) 2003年 岩波書店  
『お盆のはなし』 蒲池勢至 2012年 法藏館  
『解説 親鸞とその時代』 五味文彦 (『私訳 歎異抄』 五木寛之) 2014年 PHP 研究所  
『隠れ念仏と隠し念仏』 五木寛之 2005年 講談社  
『神の名は神』 久保田展弘 1996年 小学館  
『神の山へ - 山岳宗教の源流をゆく』 新妻喜永, 久保田展弘 1993年 山と溪谷社  
『旧約聖書 創世記』 月本昭男 訳 1997年 岩波書店  
『教行信証入門』 石田瑞磨 1989年 講談社  
『暮らしの中の神さん仏さん』 岩井廣實 1982年 文化出版局  
『山岳霊場巡礼』 久保田展弘 1985年 新潮社  
『地獄絵を旅する』 日下部行洋 2013年 平凡社  
『地獄百景』 高橋洋二 (編) 1988年 平凡社  
『地獄百景』 田中久美子 2012年 KK ベストセラーズ  
『地藏さま入門』 大法輪閣編集部編 2000年 大法輪閣  
『地藏信仰』 桜井徳太郎 1988年 溪水社  
『地藏菩薩』 望月信成 1989年 学生社  
『私訳 歎異抄』 五木寛之 2014年 PHP 研究所  
『宗教学者の父が娘に語る宗教のはなし』 鳥田裕己 2016年 牧野出版  
『宗教聖典を乱読する』 釈徹宗 2009年 朝日出版  
『ジョン・レノンなぜ神道に惹かれたのか』 加瀬英明 2011年 祥伝社  
『神社の由来がわかる小辞典』 三橋健 2007年 PHP 研究所  
『神道』 三橋健 (編) 1995年 大法輪閣  
『神道はなぜ教えないのか』 鳥田裕己 2013年 ベストセラーズ  
『図説 北欧神話』 池上良太 2011年 新紀元社  
『禅と日本文化』 鈴木大拙 (北川桃雄 訳) 1975年 岩波書店  
『大乘仏教』 佐々木閑 2017年 NHK 出版  
『吊いの文化史』 川村邦光 2015年 中央公論新社  
『なぜ日本人は神社にもお寺にも行くのか』 鳥田裕己 2017年 双葉社  
『南無阿弥陀仏』 柳宗悦 1992年 岩波書店  
『南蛮寺興廢記・妙貞問答』 海老沢有道 1983年 平凡社  
『日本の神仏の辞典』 大島建彦 2001年 大修館書店  
『日本の名僧』 今泉俣夫 (編) 2005年 吉川弘文館  
『ハリー・ポッター 現代の聖書』 鳥田裕己 2008年 朝日新聞出版  
『般若心経』 佐々木閑 2017年 NHK 出版  
『不千斎ハピアン』 釈徹宗 2010年 新潮社  
『「法華経」を読む』 紀野一義 1982年 講談社  
『仏教ではこう考える』 釈徹宗 2008年 学研新書

- 『仏教とキリスト教の比較研究』 増谷文雄 1973年 筑摩書房  
 『法然親鸞一遍』 釈徹宗 2011年 新潮社  
 『民間信仰』 堀一郎 1964年 岩波書店  
 『六波羅蜜寺』 川崎純性, 高城修三 2007年 淡交社  
 『わたしの好きな仏さまめぐり』 瀬戸内寂聴 2017年 マガジンハウス

## 5. その他

- 『雨月物語』『春雨物語』 上田秋成 (大庭みな子 訳) 1993年 集英社  
 『鬼と鹿と宮沢賢治』 門屋光昭 2000年 集英社  
 『ガリバー旅行記』 ジョナサン・スイフト  
 『金子みすゞ』 矢崎節夫 (監修) 2003年 平凡社  
 『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治 2007年 角川書店  
 『こだまでしょうか, いいえ, 誰でも -金子みすゞ詩集百選』 金子みすゞ 2011年 宮帯出版社  
 『今昔物語』 尾崎秀樹 (訳) 1991年 学習研究社  
 『今昔物語集 2』 馬淵和夫 他 (校注, 訳) 2000年 小学館  
 『地獄絵と地獄観念』 (『洞窟の偶像』) 澁澤龍彦 1998年 河出書房新社  
 『失楽園』 ジョン・ミルトン (平井正穂 訳) 2008年 岩波書店  
 『新釈 遠野物語』 井上ひさし 1980年 新潮社  
 『世界文学全集 (第2巻) 神曲』 ダンテ (平井祐弘 訳) 1973年 河出書房新社  
 『先祖の話』 柳田國男 2008年 石文社  
 『高見順詩集』 高見順 2015年 思潮社  
 『徒然草』 吉田兼好 (西尾実, 安良岡康作 校注) 1992年 岩波書店  
 『徒然草 方丈記』 山崎正和 現代語訳 1991年 学習研究社  
 『田園に死す』 『現代短歌体系 9』 大岡信 編 1983年 三一書房  
 『遠野物語』 柳田國男 2012年 角川学芸出版  
 『遠野物語』 柳田國男 2011年 集英社  
 『日本霊異記』 出雲路修 (校注) 2001年 岩波書店  
 『日本霊異記』 原田敏明, 高橋貢 (翻訳) 2000年 平凡社  
 『方丈記 徒然草』 鴨長明, 吉田兼好 (佐竹昭広, 久保田淳 校注) 1993年 岩波書店  
 『宮沢賢治詩集』 天沢退二郎 (編) 新潮文庫  
 『もう一度読みたい宮沢賢治』 蓮見清一 2009年 宝島社  
 『ユング自伝 -思い出・夢・思想-』 A. ヤッフエ 編 (河合隼雄, 藤縄昭, 井出敏子共訳) 1984年 精興社  
 『臨死体験』 立花隆 1994年 文藝春秋  
 『わたしの山の精霊 (リユーベツァール) 物語』 オトフリート・プロイスラー (吉田孝夫 訳) 2011年 さ・え・ら書房  
 『われなお生きてあり』 福田須磨子 1987年 筑摩書房  
*Adam Bede* George Eliot 1992 Everyman's Library  
*The Blue Bird* Maurice Maeterlinck (Translated by Alexander Teixeira De Mattos 2012  
 Createspace Independent Publisher  
*The Great Blue Youder* Alex Shearer 2001 Macmillan Publishers

(2018年3月30日受理)

## Funerals in Nagasaki—First Private, Second Formal

NOHARA Yasuhiro

Nagasaki city, with a population today of 420,000, used to be a poor village until Ohmura Sumitada, a feudal lord, authorized its opening as a port and the initiation of commerce with Portuguese merchants in 1571. Not only trading merchants but also many Christians moved into this village and colonized it. More than 15 churches were built in the small area one after another, and the village resounded far and wide with church bells, reminiscent of Rome itself. So Nagasaki came to be called “Little Rome.” As a matter of fact, the village was donated to the Society of Jesus. The village seemed to grow and flourish, but its prosperous years failed to last, contrary to expectations.

In 1614, the ban on Christianity was issued, which led to attacks on Catholicism, including the destruction of churches and the persecution of Christians. Churches were replaced by temples. Christians were supposed to disappear completely.

So Buddhist ceremonies came to be held in Nagasaki. One such ceremony was the *Bon* Festival, which used to be held in the middle of the seventh month in the lunar calendar. The solar calendar introduced by the Meiji Government caused a upheaval of events and seasons. The middle of the seventh month (July) in the solar calendar is in the midst of the rainy season, not a suitable season for the *Bon* Festival. During the *Bon* Festival, Nagasaki people usually visit their ancestors' grave with their family, clean and decorate the grave, and offer food to their ancestors. It is common for many families to hold a banquet at the graveyard to entertain their visitors, which in former times often resulted in the spread of plague. After a heated discussion, a conclusion was reached: the *Bon* Festival would be moved to mid-August (the eighth month).

During the *Bon* Festival, people welcome the spirits of the deceased to visit their homes, to stay with their families until the last day of *Bon*, when the spirits have to return to *Jodo*, the Buddhist Pure Land. So the family make a ship (called *Shorobune*) for the spirit, carry it to the seashore, and launch it to sail to the West. This custom is called *Shoronagashi*. At first, the ships were quite humble affairs, but over time people wanted to make them fancier as they were believed to carry the spirits to *Jodo*. Many families who lose a family member start making such a ship.

*Shoronagashi* is, in other words, a spirit boat procession unique to Nagasaki. On the last day of the *Bon* Festival, a large number of ships of various sizes are carried by family members and their friends to the seaside area to be sailed to so-called *Jodo*. The streets leading to the shore throng with ships and people. Firecrackers explode here and there, and earsplitting noises can be heard all around. People carrying the ships shout with passion. So the procession of the ships is

noisy but joyous. Behavior generally disallowed in daily life and acts beyond the bounds of common sense are traditionally permitted only during *Shoronagashi*.

On arriving at the spot to release the ship, however, deep sorrow falls on the revelers all of a sudden. Everybody is filled with a sense of loss and deprivation, recalling the feeling of a rather different event. Indeed, it seems akin to a funeral, or rather, a second funeral. To be more precise, this event ought to be considered the formal funeral.

When the family member passed away, his or her funeral was performed.

It was naturally a private funeral. Everything may well have been done all too quickly. Or the family might have had no time to think about reflecting their deceased member's intentions. They simply followed the instructions of the funeral director. But if this *Shoronagashi* is regarded as the formal funeral, all the people of Nagasaki, regardless of faith, can join the *Bon* ceremony to ship their ancestors to their respective destinations, whether *Jodo*, Paradise or elsewhere.

Even Christians, if they wish to, can join this event, which originated from Buddhism, without qualms, attesting to the fact that Christianity came first to Nagasaki, and Buddhism second. Nagasaki has grown larger through these faiths as a remarkable city.